

## 生命科学部

## 学部基礎情報

<p><b>【理念・目的】</b></p> <p>21世紀になってその進歩が益々加速度を増している、生命科学の更なる基本原理の解明と、その成果を多面的に利用し、人類の生存環境の向上に資するための諸課題に取り組むとする。「もの」と「知」と「技術」に立脚した創造的教育を志向するが、より具体的には「生命」と「環境」と「物質」三領域の有機的連関に基づく、最新生命科学の知見を活用した「持続可能な地球社会の構築」に貢献できるような人材の育成を目指す。併せて、柔軟で、統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成に努める。更に、今日グローバルな視野を持つことは不可欠であるので、この点にも配慮し、多様化社会で自立して、活躍できるためのコミュニケーション能力、自己キャリアデザインができる人材育成拠点の樹立を目的とする。</p> <p>上記理念の具体化のために、生命機能学科では、「1分子、1細胞の素機能の理解を出発点とし、有機的統合体として細胞・分子生命科学を志向した先鋭的生命科学教育」を、環境応用化学科では、「グリーンケミストリ&lt;人と環境にやさしく、持続可能な社会を目指す化学&gt;の理念を学び、低環境負荷機能的物質の開発、環境保全、エネルギーに関する応用技術のための教育」を、応用植物科学科では「植物病に対する的確な診断・治療・予防が行えるような実践的人材である&lt;植物医師&gt;の養成」を、理念として掲げ、この達成を図る。</p>
<p><b>【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的（教育目標）】※学則別表(11)</b></p> <p>生命科学部は、以下に示すような人材を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生命・環境・物質（資源・エネルギー）・食料などの諸問題解決のための学際的学問を習得し、柔軟で総合的視野を備えた実践的研究・技術者。</li> <li>2. 多様化社会で自立して、活躍できるためのコミュニケーション能力、国際性、問題解決能力を有し、キャリアデザインができる人材。</li> </ol> <p>さらに、各学科において以下を設定する。</p> <p>&lt;生命機能学科&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 幅広い科学の見識を備え、個々の生体分子の機能から高次の生命システムまで総括的に把握できる人材。</li> <li>2. 論理的思考に基づいて、仮説を立て、それを実験によって検証できる人材。</li> <li>3. 科学英語に習熟し、豊かなコミュニケーション能力を備え、国際的に活躍できる人材。</li> </ol> <p>&lt;環境応用化学科&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「グリーンケミストリ」の理念を習得し、21世紀型先端化学を基礎として、産業界で活躍する高度な科学技術者・研究者。</li> <li>2. 化学および自然科学の専門知識を着実に身につけ、未知の問題を解決できる柔軟性を備え、国際性を身に付けた技術者・研究者。</li> </ol> <p>&lt;応用植物科学科&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 植物とそれを害する生物・環境の間での相互作用を総合的に捉えることができ、実地での植物病の診断と治療ができる研究・技術者。</li> <li>2. 食料、環境問題とその背景となっている経済・社会的総合知識を習得し、温暖化や流通のグローバル化によりもたらされる世界規模の問題に対応できる人材。</li> </ol>
<p><b>【ディプロマ・ポリシー】</b></p> <p>生命科学部は、以下の能力を備えた学生に学位を付与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語科目、教養科目、理系教養科目単位を修得し、幅広い知識を有する。</li> <li>2. 学部内の共通専門科目の履修を通じて生命科学および化学の学際的知識と総合的視野を有する。</li> <li>3. 専門実験・実習科目を履修し実践的な課題解決能力を有する。</li> <li>4. 卒業研究、課題研究を履修しコミュニケーション能力、問題解決能力を備える。</li> </ol> <p>各学科の学位授与方針は次の通りである。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

<生命機能学科>

1. ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門的知識を身につけた上で、生命科学の総合的理解ができる。
2. 広い学問的視野、論理的思考能力、実践的な課題解決能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに情報を収集し、自立的に考え、それを論理的に説明できる能力を備えている。

<環境応用化学科>

1. 化学に関する専門知識の習得とそれを生かした問題解決能力を備えている。
2. 化学に関する実験操作を自ら行い、その結果を正当に評価し、論理性ある結論が導きだせる能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに豊かなコミュニケーション能力を備え、自らの意見を論理的に説明できる能力を備えている。

<応用植物科学科>

1. 様々な植物病について、的確に診断・予防・治療できるための専門的知識とその遂行能力が備わっている。
2. 食の安全や環境についての知識を持ち、植物保護の技術を理解しリスク評価を行える総合的能力を有する。
3. 専門教育で得た知識を活用し、さまざまな分野で新しい科学や技術が現代社会に与える影響を自らの力で正しく評価し、その内容の正確な伝達ができる説明能力が備わっている。

【カリキュラム・ポリシー】

生命科学部では、以下の特色を持つ教育課程を編成する。

1. 初年次教育として自立性やプレゼンテーション能力を涵養するための科目を設定する。
2. 英語科目、教養科目、理系教養科目の単位取得を卒業要件に含める。
3. 1年次より専門実験・実習科目を配して、早期より専門性を高める。
4. 学部内で共通履修できる専門科目を設け、専門分野での総合的科学家の見地を養う。
5. 各学科で学生の興味に合わせた専門性をより高めるべく3つの履修コースを設定する。

各学科の詳細な教育課程の編成とその実施の方針は以下の通りである。

<生命機能学科>

ゲノム・タンパク質・細胞に関連する科目を中心としてカリキュラムを編成し、生命を、個々の生体分子の機能が統合された現象としてとらえ、深く理解できるような専門科目を配置する。また、三履修コースとして、「ゲノム機能」、「タンパク質機能」、「細胞機能」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせる。全体としては次の点に配慮する。

- ・初年次から実験・演習科目を設定する。
- ・研究室配属による課題研究・演習の履修を2年次から可能とし、理論・知識と実践的技術の相乗的効果によって高度な専門性の習得を推進する。
- ・学部内の教養科目、学科横断的な専門科目の複数の習得を推奨する。
- ・教員研修の結果をフィードバックさせ、履修指導や講義の改善を図り、きめ細かく柔軟性のある教育を遂行する。

<環境応用化学科>

化学に関する基礎科目を習得したのち、三履修コースを設け、より専門度を高めるようカリキュラムを配置する。三履修コースとして、「物質創製化学」、「グリーンケミストリ」、「環境化学工学」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせるとともに、卒業後選択する職業への指針を与えるよう配慮する。カリキュラム全体としては、次の点に配慮する。

- ・全学年に実験科目を配し、化学技術者および研究者としての基礎技術を身に付けさせる。
- ・初年次は、高校からの円滑な移行をはかるための教育およびキャリア教育を行う。3年次には卒業研究のための準備教育を行う。4年次には、卒業研究を課し、社会人、大学院進学への準備を徹底するよう、少人数教育に努める。
- ・公的資格取得のための教育にも配慮する。

<応用植物科学科>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

植物、微生物と昆虫に関する、分子・細胞生物学からマクロな生態学まで配置し、併せて食料、環境、社会経済問題まで広範に、総合的な知識を修得可能なメニューを配する。特に、植物保護に関わる技術や資格取得のための知識修得の機会を設ける。三履修コースとして、「植物クリニカル」、「グリーンテクノロジー」、「グリーンマネジメント」を設定する。以下の点に配慮する。

- ・実験・実習を初年次から開始して、基礎訓練を行い、その後段階的に高度な診断・防除技術を修得するような実践的で、体系的な教育プログラムを設定する。
- ・公的資格（技術士補、樹木医補、自然再生士補）の取得プログラムを配置するとともに、植物関連の食料・環境・バイオ関連の企業・公的機関へのインターンシップを行う。
- ・関連する法令や制度、国際動向、関連ビジネスについての知識修得の場を設ける。

#### 【アドミッション・ポリシー】

生命科学部では以下を学生の受け入れ方針とし、さらに学科ごとに詳細を定める。

1. 入学後の修学に必要な数学や理科（物理、化学、生物、地学）の基礎知識や基礎実験技術を備えている。
2. 入学後の修学に必要な言語能力（特に日本語・英語）と、社会や文化についての知識を有する。
3. 学問を貪欲に吸収し、科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲を有する。
4. 物事を論理的に幅広く考察することができる。

#### <生命機能学科>

21世紀の生命科学は、従来の枠組みを超える学際的な学問へと展開している。したがって、専門的知識を幅広くかつ正しく理解し、応用できることはもちろん、日本語および外国語を用いたコミュニケーション能力をもち、人文学や社会科学の素養を踏まえた幅広い視野をもつ人材が望まれる。本学科では、以下のような入試制度を設置して、さまざまな経路から熱意のある有為な学生を広く募集し、学生の多様性を高め、学生どうしの相互啓発を促し、教育効果の促進を図る。

- 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）  
A方式では、英語、数学と理科の成績によって、総合的学力を評価する。
- 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）  
出願書類及び面接等によって、基礎学力と学習意欲、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。
- 外国人留学生入試、帰国生入試等  
出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と生命科学に関する基礎学力を有すること、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。

#### <環境応用化学科>

創造性を高め、相互に琢磨する教育環境を構築し、多様な素質を持った学生を受け入れるために、下記のような入試制度を設けている。入学後の学生の追跡調査により、これら入試制度のより適切な運用、改善に努めている。

- 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）  
A方式では、英語、数学と理科によって、基礎的な学力と、化学及び自然科学における問題解決能力を評価する。
- 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）  
出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、化学への関心と、化学及び自然科学における問題解決への意欲を評価する。
- 外国人留学生入試、帰国生入試等  
出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と化学に関する基礎学力を有すること、化学及び自然科学における問題解決への意欲と本学科への志望意思を確認する。

#### <応用植物科学科>

植物は人類が地球上で生存していく上で必要不可欠な生物であるとの認識のもと、食料、資源、環境問題に関心を持つ意欲あふれる次のような学生を受け入れることを基本としている。

1. 最新の生命科学の知識を貪欲に吸収し、科学技術の発展を通じて社会に貢献しようとする学生
2. 現代社会のかかえる広範で深刻な問題を、柔軟な思考と実践的な能力を基礎にして解決しようとする研究・技術者を目指す多様な学生

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

3. 国際的な視野で食料、環境問題や、貧困や飢餓問題に勇敢に挑戦し、解決に向けて国際舞台で活躍しようとする意欲ある学生
- 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）  
A方式では、英語、数学と理科の成績によって、総合的学力を評価する。
  - 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）  
出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、植物医科学への関心と、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲を評価する。
  - 外国人留学生入試、帰国生入試等  
出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力や生命科学に関する基礎学力、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲、および本学科への志望意思を有することを確認する。

【定員管理の状況】

定員充足率(2017～2021年度)(各年度5月1日現在)

年度	入学定員	入学者数	入学定員充足率	収容定員	在籍学生数	収容定員充足率
2017	230	226	0.98	902	960	1.06
2018	230	228	0.99	902	935	1.04
2019	230	223	0.97	920	936	1.02
2020	230	219	0.95	920	903	0.98
2021	236	233	0.99	926	913	0.99
5年平均			0.98			1.02

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	改善課題	是正勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20以上	1.25以上
上記以外の分野	1.25以上	1.30以上

【定員未充足の場合】

提言	改善課題	是正勧告
すべての分野共通	0.9未満	0.8未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
入学定員超過率	1.20以上	1.17以上	1.14以上	1.10以上	1.10以上	1.10以上	1.10以上
収容定員超過率	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上

【求める教員像および教員組織の編成方針】(2018年度自己点検・評価報告書より)

理念・目的で示される「生命」、「環境」、「物質」の領域に応じて組織された2学科、2専修（生命機能学科生命機能学専修、同学科植物医科学専修、および環境応用化学科）での「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、および「アドミッション・ポリシー」に立脚した教育研究を多様な形で学生に指導、支援できるように努める教員を求める。従って、教員組織の編成に関わる方針は、生命機能学専修では、「生体を構成するタンパク質・ゲノム・細胞から、生命をそれらの有機体として捉え、かつ、これらの学問領域での先進的教育と研究を実践できる教員」を、植物医科学専修では「植物医科学分野で最先端の知識・技量と豊富な経験を有し、資格取得のサポートもできるような実践的教育・研究を遂行できる教員」を求める。環境応用化学科では、「21世紀型先端化学を修めることができるような、グリーンケミスト

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

りを基礎理念として、有機化学、無機化学、物理化学、環境化学、化学工学各分野をバランスよく習得していることを要件とし、更に、境界領域までカバーするような教員」を求める。このような教員像に基づき教員組織の編制がなされている。

#### 【専任教員数および年齢構成一覧】

2021年度専任教員数一覧（2021年5月1日現在）

教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任 教員数	うち教授数
24	7	3	2	36	25	14

専任教員1人あたりの学生数（2021年5月1日現在）：25.4人

年齢構成一覧（2021年5月1日現在）

年度\年齢	61歳～70歳	51歳～60歳	41歳～50歳	31歳～40歳	30歳以下
2021	6	12	15	2	1
	16.67%	33.34%	41.67%	5.56%	2.78%

## I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

### 【2021年度大学評価結果総評】（参考）

生命科学部の2020年度の中期目標、年度目標に関して、教職担当教員の採用が決定されたことは目標の達成として評価でき、今後の教育成果に期待したい。内部質保証、教育課程・学習成果、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携の評価項目は十分達成されており、適切に運営されている。学生の受入れに関しては、学生アンケートの実施が望まれる。

また在外・国内研究員枠を利用した新たな助手制度について検討を始めた点は、研究者養成として有益な制度として実現が望まれる。

2020年度自己点検・評価活動に関しては、専任・兼任教員による全教職員に向けての授業公開はFD推進活動として高く評価できる。

またコロナ禍における全講義調査を実施し、それに基づく授業方法の改善を試みた努力は注目に値する。オンライン授業の需要が増すと思われる今後の講義形態への転換を図る上でも、継続して推進することを期待したい。

### 【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

「十分達成されている」と評価された内部質保証、教育課程・学習成果、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携に関しては本年度も適切な運営を継続する。特に教育課程・学習成果においては、COVID-19に対応するために引き続きハイフレックス講義の拡充を図るとともに、実験・実習などを中心に対面授業の機会を増やしていく。学生の受入れに関しては、2021年度はGoogleフォームを用いた方法によってアンケートを実施することによって有用なデータが得られたため、2022年度も新1年生に対して継続して実施する。在外研修制度については、海外での研究活動から帰国した教員による報告会を2021年度にオンラインで開催して、在外研修制度への理解と成果について共有した。教育方法については、専任・兼任教員による授業公開を2021年度も全教職員に向けて実施するとともに、教授会の時間帯を利用してFD活動を複数回実施した。2022年度も継続して授業公開やFD活動を実施し、授業方法を改善するための組織的な取り組みを行う予定である。

### 【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

生命科学部に対する2021年度の大学評価委員会からの評価結果は全面的に良好なもので、特に問題となるものはない。その良好と評価された2020年度の活動内容を、着実に進めると同時に、より安定的に定着をする取り組みを進めている。さらに、COVID-19対応のハイフレックス講義の拡充と、実験・実習を中心とした対面授業の増加というメリハリの効いた運営で、状況の変動にも適切に対応しており、学部執行部を中心として学部全体としての優れた運営体制が取られている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

## II 自己点検・評価

### 1 理念・目的

#### (1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

1.1①学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。2018年度1.1②に対応

はい

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1③に対応

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

生命科学部では、各学科において、担当教員がカリキュラム運営・学生の学習状況・志願者数・学科独自のものを含む各種のアンケートなどを検討し、教室会議できめ細かい議論を行っている。さらに、生命科学部執行部会議で適宜検証を行い、必要に応じて教授会に諮ることで理念・目的の適切性を検証している。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。2018年度1.2①に対応

はい

1.2②学部（学科）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2②に対応

はい

#### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

生命科学部では、その理念・目的をホームページやパンフレットにより社会に周知するとともに、学生には年度初めに行うガイダンスで周知を図っている。さらに各学科が独自のホームページを構築し、パンフレット等を作成することで、一層の周知を図っている。

#### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし

#### 【理念・目的の評価】

生命科学部全体と生命機能、環境応用化学、応用植物科学のそれぞれの学科という二段階の組織の構造に応じて、理念・目的が適切に設定されており、それらは大学の理念・目的を踏まえたものである。理念・目的については、学科の教室会議での議論を土台として、学部の執行部会議や教授会でその適切性が検証されている。教職員はこの検証体制の中で理念・目的を知悉しており、また学生に対しては年度初めのガイダンスで周知されている。社会に対してもホームページやパンフレットで周知しており、その取り組み全体を見るに、理念・目的は適切に検証および周知されている。

### 2 内部質保証

#### (1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

はい
<p>【2021年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生命科学部質保証委員会は、学部長、教授会主任、副主任、および各学科より選出された委員の計6名で構成されている。2021年度の構成は、委員長：津田新哉、委員：山下明泰、大島研郎、曾和義幸、金子智行、渡邊雄二郎である。</li> <li>開催状況と議題等は下記のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> <li>第一回：5月10日（月） 議題：委員長の選出・2017年度自己点検・評価活動について</li> <li>第二回：5月17日（月） 議題：自己点検・評価シートについて</li> <li>第三回：10月25日（月） 議題：中期目標・年度目標達成状況報告書について</li> <li>第四回：3月2日（水） 議題：自己点検年度末報告について・質保証委員による点検・評価について</li> </ul> </li> </ul>

2.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19 への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。 **新規**

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>生命科学部では、2020年度はオンライン授業やオンデマンド授業の充実に尽力し、2021年度はハイフレックス授業や対面での実験実習を再開するなど、COVID-19 対策に配慮しながら学習成果の向上を目指した教育方法を模索してきた。質保証委員会や執行部による内部質保証組織がこれらの取り組みを点検・評価することにより、感染症の状況に応じた適切な対応が実施できた。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生命科学部質保証委員会議事録</li> </ul>
---

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割を明確に分け、厳格な PDCA サイクルを担保する体制で内部質保証を実施した。今後も引き続き厳格な自己点検を継続する。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>特になし</p>

【内部質保証の評価】

<p>生命科学部の質保証委員会は、学部長、教授会主任、教授会副主任、各学科より選出された委員の計6名で構成されており、年4回の委員会が開催されている。COVID-19 対応については、感染拡大への配慮が必要な中での学習成果の向上を目指した教育方法の模索について、常日頃から点検・評価するという体制にあることで、学部全体として状況に応じて適切な対応が実施されている。</p>
--

3 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

3.1①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。2018年度3.1①に対応

はい

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

3.2①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。2018年度3.2①に対応

はい

3.2②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。2018年度3.2②に対応

はい

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

- ・ 大学案内
- ・ 学部パンフレット
- ・ 学部ホームページ <http://www.hosei.ac.jp/seimei/>
- ・ 生命機能学科ホームページ <http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・ 環境応用化学科ホームページ <http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・ 応用植物科学科ホームページ <http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/>

3.2③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と関連性の検証プロセスを具体的に説明してください。

2018年度3.2③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

生命科学部執行部会議で適宜検証を行い、必要に応じて教授会に諮ることで教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性を検証している。2016年度に生命科学部3学科とも学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を見直し・改訂を行い、その後も入試制度の変更に対応して、適宜改訂を行っている。さらに、各学科の教室会議においてきめ細かい検証を行っている。生命機能学科の新カリキュラム（2013年改訂）では、専門科目を体系化したことに加え、より柔軟な研究室配属時期の選択を可能としており、効果的な教育・研究を目指している。その教育効果をはかる指標の一つとして大学院進学率をモニターしているが、新カリキュラムで学んだ卒業生の本学大学院進学率は上昇傾向にある。今後も中長期にわたってカリキュラム改訂がもたらす教育効果について総合的に検証する。環境応用化学科では、ほぼ毎週教室会議を開催し議論をおこなっている（2021年度は40回）。応用植物科学科では、技術士一次試験合格者、樹木医補および自然再生士補登録者を把握することで、教育課程の編成・実施方針の適切性を分析している。また、学生の就職状況を分析し、社会状況の変化と対応について評価・検討している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 各学科教室会議（教員会議）議事録

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

3.3①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。2021年度1.1①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

学生が問題意識をもち、自ら学ぶ自立性を涵養するために、1年次から実験・演習科目を導入している。学びの意欲を上げるために、各学科とも優秀な卒論や資格の合格に対し、表彰を行っている。生命機能学科では、「生物化学」「分子生物学」「細胞生物学」「生物物理学」分野の講義を担当する専任教員が、講義内容を綿密に協議・検討して分担し、体系的なカリキュラムを設定している。研究に対して高い意欲をもつ学生に対しては、2年次から「ゲノム」、「蛋白質」、「細胞」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。



<p>のいずれかの分野の研究室に所属し、講義と並行して研究を行うことも可能にしている。希望すれば4年次まで同じ研究室で研究を継続することができる。環境応用化学科では、公的資格試験(採用試験)合格者等を生命科学部奨励賞として毎年度表彰している。「基礎応用化学実験」、「応用化学実験 IAB, IIAB」、「卒業研究」および演習科目を各学年に設置し、自ら学ぶ能力の育成に力を入れている。応用植物科学科では、樹木医補、自然再生士補、技術士補などの各種資格の取得に向けた科目を開講するとともに、公務員受験対策コースの設定やインターンシップを必修科目とするなど、社会が求める人材の育成に努めている。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部履修の手引き</li> <li>・生命機能学科教室会議事録</li> <li>・生命科学部賞募集要項</li> </ul>

### 3.3②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。2021年度1.1②に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>「カリキュラム・ポリシー」に基づき、各学科では3つの履修コースを設定し、カリキュラムマップで順次性を含め体系的な教育課程を明示している。</p> <p>生命機能学科：ゲノム機能コース、蛋白質機能コース、細胞機能コース  環境応用化学科：物質創製化学コース、グリーンケミストリコース、環境化学工学コース  応用植物科学科：植物クリニカルコース、グリーンテクノロジーコース、グリーンマネジメントコース</p> <p>1, 2年次において各コースに進むための基盤となる重要な講義科目・実習科目を必修とし、3, 4年次における発展的な専門科目は学生の興味に応じて選択としている。専門教育の接続科目として、物理学基礎、化学基礎、生物学基礎、微分積分学及び演習・線形代数学及び演習、科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲなどの理系教養科目が適切に配置されている。科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは選択科目であるものの専門科目への導入の役目を果たす重要な教養科目であり、環境応用化学科では必修に近い扱いとしており、生命機能学科においても2年生から研究室配属を希望する学生には修得を義務づけることにより、8割以上が履修するシステムを作った。ただし、2021年度は履修率がやや低下した。これがコロナ禍の影響かどうか不明であるが、2022年度は対策を講じたい。応用植物科学科では、全学生に対し、植物病の診断・治療・予防の先端技術習得に必要な基礎生命科学に関連する科目の履修を推奨している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部ホームページ <a href="http://www.hosei.ac.jp/seimei/">http://www.hosei.ac.jp/seimei/</a></li> <li>・生命機能学科ホームページ <a href="http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> <li>・環境応用化学科ホームページ <a href="http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> <li>・応用植物科学科 <a href="http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> <li>・生命科学部履修の手引き</li> </ul>

### 3.3③幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。2021年度1.1③に対応

<p>S： さらに改善することができた</p>
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>2012年度に小金井リベラルアーツセンターが設置されて以降、生命科学部と理工学部の教養教育科目の実施に際して調整等を行っている。各学科とも初年次科目を指定し、幅広い教養が身につくよう配慮している。また、卒業研究を通して自立性やプレゼンテーション能力を涵養できるようにしている。特に、2017年度に数学担当、2018年度に物理学担当の教養の専任教員が生命科学部所属として純増で着任し、化学担当の教養教員は、2018年度以前に任期付きであったもの</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

が2019年4月から専任となった。また、2021年度には教職担当の専任教員が着任し、バランスのとれた教育体制が整った。2018年度からは、教養・専門教育連携委員会を実施し、教養教育と専門教育の連携についての問題点の共有や今後の課題について話し合っている。これらの取り組みにより、生命科学部にふさわしい教養教育をコーディネートする体制が整いつつあり、教養科目の授業担当者と対象学科との緊密な連絡も行われている。生命機能学学科では、生命科学を学び、研究する上での基礎学力をつけるため、教養科目の履修についてもガイダンスや授業の中で指導している。たとえば、数学・物理学・化学の教養科目の修得を強く推奨し、英語強化プログラムの受講も推奨している。また、独自の教養科目として、生命機能学基礎実験 I, II, 生命機能学基礎英語 I, II を必修科目として設定し、実験の原理の理解や手技、科学英語の読解などの能力の涵養を図っている。また、1～3年生にも卒論発表会への参加、レポート提出を義務づけ、上級生の研究成果や研究に取り組む姿勢から触発される機会を設けている。そして、早い時期から研究室に所属できるというカリキュラム上の特色を生かし、研究を通して総合的な判断力の育成を目指している。同時に、研究室におけるコミュニケーションを通して社会性を身につける機会を与えている。環境応用化学科では、1年次春学期の必修科目「応用化学基礎」において、学科の専門科目を踏まえた教養科目の履修指導を行うとともに、教員との対話、学生間のディスカッションの場を提供し、総合的な判断力や豊かな人間性を養うことに努めている。さらにラーニングサポーター制度により上級生と交流する機会を設けることで、学習意欲の向上のみならず人間形成にも役立っている。応用植物科学科では、実験・実習科目(1, 2, 3年次必修)において、学生参加、問題解決、対話型の授業を、インターンシップ(2年次必修)では対話型、学生参加型(インターンシップ体験発表)の授業を実施しており、総合的な判断力や豊かな人間性の涵養に努めている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

教職担当の専任教員が採用されたことにより、教職科目が生命科学部の専任教員によって担われることになった。これにより、英語、数学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学などの教養科目を含めて、バランスのとれた教養教育体制が整った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部教授会議事録
- ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類
- ・各学科教室会議(教員会議)議事録
- ・基盤教育タスクフォース委員会最終報告

3.3④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。2021年度1.1④に対応

S: さらに改善することができた

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

初年次教育として、入学時にプレースメントテストおよび TOEIC-IP テストを実施し、クラス分けを行っている。推薦入試制度を通して入学した学生に対しては、入学前教育として e-ラーニングの履修を課している。2017年度以降は学務と学科主任からそれぞれ独立に、e-ラーニング受講を徹底して呼び掛けている。さらに、付属校入学予定者向けガイダンスで、各学科主任より春休み期間に行う課題を課している。また、高校で「物理学基礎」「化学基礎」「生物学基礎」を履修しなかった学生を対象に、これらの科目に対応する理系教養科目を開講し、大学に必要な理科の知識の修得を図っている。さらに、付属校に特化した取り組みとして、適切な高大接続を行えるように、説明会や模擬授業等のイベントを行っている。2021年度には、リメディアル科目の設置や、専門と基礎をつなぐ新規学部共通科目の検討を行うことを目的として、基礎教育カリキュラム委員会を発足させた。生命機能学学科では、1年次のガイダンス時に、必修実験演習科目のテキストとして「生命機能学実験の手引き」を配布している。このテキストには、実験の技術的な内容だけでなく、生命科学と英語の学習法、作文技術などについても掲載し、その内容についてのオンデマンド授業も行っている。初年次(春学期・秋学期)には「分子生物学 I, II」「生物化学 I, II」「細胞生物学 I, II」「生物物理学 I, II」という必修の専門科目を設置し、高大接続に配慮した上で、大学レベルの生命科学の基礎を習得させるとともに、さらに進んだ専門科目への導入を図っている。また、1年秋学期、2年春学期には「生命機能学基礎英語 I, II」を設置し、能力別少人数クラスで、科学論文を読む上で必須となる英語読解の基礎力を教えている。さらに、ラーニングサポーター制度を利用して、学生どうし連携した自主的な学びの場を提供している。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学基礎」「応用化学入門」を通して導入教育を行っている。応用植物科学科では、初年次にレポートの作り方や資料の収集方法など、基本的な学習法を教育している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>学生によっては、専門教育に必要な科目を高校での学習において履修しておらず、基礎的な学力が不足している場合がある。そこで、カリキュラムを適切に変更することを目的として、2021年度に基礎教育カリキュラム委員会を発足させ、リメディアル科目の設置や、専門と基礎をつなぐ学部共通科目の再編成の検討を開始した。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部履修の手引き</li> <li>・生命科学部教授会議事録</li> <li>・各学科教室会議（教員会議）議事録</li> <li>・生命機能学科生命機能学実験の手引き</li> <li>・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表</li> <li>・環境応用化学科応用化学基礎、応用化学入門シラバス</li> <li>・応用植物科学科アンケート</li> </ul>
---

3.3⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。2021年度1.1⑤に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>定期的に TOEIC-IP テストを実施して、そのスコアを教室会議で評価・議論している。また、2014年度より ERP 科目を卒業単位として認定（12単位を上限）した。ERP についてガイダンス等で周知を図り参加を強く推奨している。さらに SGU 採択に伴い、2017年度より各学科の専任教員が参画するグローバルオープン科目（英語で自然科学を教授する）を設定し、開講している。また、英語による専門科目の設置についても検討している。特筆すべき実践として、生命機能学科では、1年次（秋学期）～2年次（春学期）には基礎科学英語を、3年次（秋学期）～4年次には科学英語を必修科目として少人数クラスで実施している。基礎英語については TOEIC-IP テストの成績に基づいたクラス分けをすることにより、学生の能力に応じたきめ細やかな教育を行っている。また、コロナ禍以前には、来日した海外の研究者によるセミナーを開催し、学部全体に公開していた。状況が改善すれば再開したい。環境応用化学科では、全教員が英語を取り入れた講義に取り組んでおり、教材・小テストを英語化するなど、国際性を養うための教育に取り組んでいる。また、新年度の学生向けガイダンスにおいて、海外留学・国際交流ガイダンス、ERP への積極的な参加を推奨している。応用植物科学科では、各学年のガイダンス等で ERP などの英語教育を積極的に推奨し、受講を促している。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部履修の手引き</li> <li>・生命科学部 ERP、アンケート調査</li> <li>・生命機能学科国内外研究者によるセミナー件数</li> <li>・環境応用化学科ガイダンス資料</li> </ul>

3.3⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。2021年度1.1⑥に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>学生に対して効果的な理系キャリア教育を実施するために、執行部、各学科就職担当教員がキャリアセンターと連携する体制を確立している。学部の理念に掲げる「統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成」を実現するために、キャリアパスの第1段階として大学院進学を重視し、2016年度よりキャリアセンター主催で開催されている「理系進学ガイダンス」において、生命科学部は講演内容を吟味し、学部生へ参加を呼びかけるなど実施に協力している。生命機能学科では、3年生を対象に「進学説明会」と「就活説明会」を開催している。進路選択の判断材料を与えるため、研究者・技術者として活躍している大学院修了生に自身の体験を話してもらっている。2021年度は、講演者に来校してもらい、ハイフレックスで開催した。初めての試みとしてキャリアセンター職員を招待し、今後の連携の一助とした。環境応用化学科で</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

は、1年次の必修科目「応用化学基礎」において、専門家によるキャリア教育を2回実施し、社会的・職業的自立を志向した学ぶ意欲の育成を行っている。応用植物科学科では、キャリア教育の一環として、技術士試験対策、樹木医補、自然再生士補の資格取得に向けた科目を初年次から受講するように指導している他、「植物医科ビジネス論」(2年生)、「植物医科学法論」,「知的財産総論」(3年生)などの実践的科目を配置している。また、2年次の秋学期にはキャリアアップ・ガイダンスを行い、専門家による講演や先輩の就活体験談を通じて進路選択の動機付けを行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・各学科教室会議(教員会議)議事録
- ・生命機能学科生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験I/II・基礎演習I/IIシラバスと予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科植物医科学応用実験II予定表(ガイダンス案内)

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

3.4①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

A: 従来通り効果的に取り組むことができた

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・各学科の入学時、学年別および留級生ガイダンス等において、理系教養科目の履修法など、幅広い科学の素養を身につけるためのポイントを丁寧に指導している。
- ・生命機能学科では、理系教養科目(化学、物理学、数学等)の積極的な履修を、教務担当教員が中心となって指導している。また、専門科目についてもカリキュラム・ポリシーに基づいた3つの履修コースの履修モデルを提示している。また2017年度からの試みとしてFB(生命機能学科)セミナーを2021年度においてもマイクロナノテクセンターとの共催として開催し、研究講演と懇談会を実施して最先端の研究に触れることで学習意欲を活性化させることを目指した。
- ・環境応用化学科では、1年次春学期の「応用化学基礎」において、履修登録予定表を担当教員が確認し、履修に関するきめ細やかな指導をしている。特に、理系教養科目(化学、物理学、数学)の履修を強く推奨している。さらに、留級生を対象とする個別面談の機会を設けており、親身な履修指導を実施している。
- ・応用植物科学科では、各学年に対して2名ずつの教員を「学年担当」として配置するとともに、ラーニングサポーター制度を活用することによってよりきめ細かい履修指導を継続している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科ガイダンス資料
- ・生命科学部履修の手引き
- ・FB(生命機能学科)セミナー案内
- ・環境応用科学科履修登録予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科役割分担表

3.4②学生の学習指導を適切に行っていますか。2021年度1.2②に対応

S: さらに改善することができた

※取り組み概要を記入。

生命科学部では、全専任教員がオフィスアワーを設定して学生の個別指導に当たるとともに、各学科に学生問題を担当する教員を置いている。また、実験科目を中心として課題の提出状況などをモニターすることによって、成績不振学生等の個別対応を行っている。生命機能学科では、1~3年生の各学年の担任教員および基礎実験演習担当教員を設定し、基礎実

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

験、演習科目等の実践的教育を行う際の、学生の学習上の問題に対応している。卒業研究については、学生の研究の進捗度に合わせて成果発表を口頭またはポスターから選択できるようにし、論理的な説明法の習得と、多くのディスカッションを通じた論理的思考能力の育成を行っている。2021年度は、研究室におけるディスカッションに加えてオンラインでの研究指導も行うことにより、より円滑な指導体制を確立した。環境応用化学科では、教員は「応用化学基礎」の時間やオフィスアワーを用いて、きめ細かな学習指導を行っている。成績不振者については毎週実施される教室会議の中で情報を共有し、学科主任及び授業担当教員がケアするようにしている。教務助手が分担して主要講義・実験・演習科目に出席することで、その講義内容を把握し、学生からの質問等に対応できる体制を整えている。さらにTAがこれらをサポートする体制をとっている。応用植物科学科では、オフィスアワーを用いた個別指導のほか、成績不振者については教員会議で情報を共有するとともに、学生問題担当教員が優先的にケアしている。また、各学年の実験実習科目の指導は学年担当の教務助手が実験技術指導を担当するほか、全学年を通じて教育技術嘱託が植物栽培管理指導を行う体制を継続している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科に学生問題を担当する教員を置くとともに、実験科目を中心として課題の提出状況などをモニターすることによって、成績不振学生等の個別対応を数多く行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命科学部教授会議事録
- ・生命機能学科各種委員リスト、ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム
- ・生命機能学科教室会議（教員会議）議事録
- ・環境応用化学科基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB, IIAB テキスト
- ・応用植物科学科教員会議議事録

### 3.4③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。2021年度1.2③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

生命機能学科では、1, 2年次の基礎実験・演習・科学英語の科目において、統一テストを行うことで各学生の達成度を可視化し、それに基づいて課題を与えるなどの指導を行っている。2020年度からは新たにオンデマンド教材を作成し、事前学習と課題等により学習時間を確保した。環境応用化学科では、専門科目において毎回課題を課す、講義開始前に前回の講義の内容の小テストを随時行うなど予習、復習をおこなわせる工夫をしている。また、各科目で学習支援システムを活用して授業に関連した資料を授業の前後に学生に配布するなど、授業の予習・復習がおこなえるように十分に配慮している。応用植物科学科では、翌週の学生実習での実習内容を説明し、当日までに予習を行わせる工夫をしている。また、教員や学科内で保有する専門図書を閲覧可能として、予習・復習に適した学習環境を整えている。その他、多くの専門科目において学習支援システムで予習復習に役立つ資料を提供し、個別に学習できる環境を整えている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科 基礎実験 I/II・基礎演習 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・生命機能学科 基礎英語 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・環境応用化学科 有機化学 I・II シラバス
- ・応用植物科学科 植物医科学基礎実験 I・II, 植物生産基礎実習 I・II, 植物医科学応用実験 I・II, 植物医科学専門実験 I・II, 各専門科目のシラバス

### 3.4④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行なっていますか。2018年度3.4④に対応

はい

【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。</p> <p>春学期、秋学期各々について30単位を超えて履修登録することができない。2014年度以降の入学生は、年間の合計が49単位を超えて履修登録することができない。</p> <p>ERP、グローバル教育センター主催科目、グローバルオープン科目は自由選択科目として、卒業所要単位の算入するが、12単位を超えて履修・修得することができない。</p>
<p>【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。</p>
<p>科学技術コミュニケーション演習、および卒業要件とならない教職科目や資格科目は、履修制限の対象外となる。2年次以上の成績優秀者は、他学部科目履修者制度により、年間4科目(かつ)8単位以内を上限として本制度に参加している学部の対象科目を履修することができ、この範囲であれば、例外的に上限を超えて履修登録することができる。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・生命科学部履修の手引き</p>

### 3.4⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。2021年度1.2④に対応

<p>A：従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入(取組例:PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。</p> <p>・生命機能学科では、2年次から配属された学生には「生命機能学研究論文」の履修と口頭による卒業研究の成果発表を、3年次から配属された学生にはポスターによる成果発表を推奨している。これにより、卒業研究全体のレベルを落とすことなく、学生の意欲に応じた高い専門教育が行えるようになった。また、ポスター発表形式を導入した事により、他学科の教員を含めた多くの聴講者を集めることになり、広い学問的視野の育成に効果が期待できるようになった。なお、2020～2021年度は、学科の全学生が参加できるオンライン発表会をZoomを用いて開催した。オンラインの利点が活かされた効果的な成果発表会となった。</p> <p>・環境応用化学科では、講義科目と実験科目の関連性を検証している。予習や復習がいつでもおこなえるオンデマンド型の講義体制を取り入れることを目指して、学習支援システムを活用している。実験科目、講義科目ともに動画ファイルの利用を本格的に開始している。</p> <p>実験科目については2017年度に「学生実験体制」に関する検討会を開催して決定した方針に従い、実験科目の教育体制を刷新した。春学期終了時及び秋学期終了時に検討会を開催し、2018年度より導入した「機器解説・演習」及び「発表スライド作成」の教育効果などについて議論し、改善に役立つ取り組みを継続した。</p> <p>・応用植物科学科では、1年生の学生実習において課題に関するプレゼンテーション資料の作成、発表、2年生では必修科目として全学生にインターンシップを実施、3年生では自ら研究計画を立て自主的に病害虫の診断を行う問題解決型の実習を実施するなど、学生参加型・対話型の教育を数多く取り入れている。また、学科内に開設している植物医科学センターの実践的な活動(植物病害虫診断事業)を4年次の卒業論文研究に生かすことで、問題解決能力に加えて、主体的思考能力や社会的適応性を育成する試みを行っている。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・生命科学部履修の手引き</p> <p>・生命機能学科ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム</p> <p>・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表</p> <p>・環境応用科学科学習支援システム利用の試み</p> <p>・環境応用化学科教室会議事録</p> <p>・環境応用化学科学生実験体制についての検討会議事録</p> <p>・応用植物科学科各学年ガイダンス資料、卒業論文発表会講演要旨、植物生産基礎実習 I・II、植物医科学専門実験 I、植物医科学インターンシップのシラバス、植物医科学センターのパンフレット</p>

### 3.4⑥それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。2021年度1.2⑤に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

※どのような配慮が行われているかを記入。

生命機能学科では、基礎科学英語において能力別に18名程度以下の少人数クラスを編成している。また、基礎実験では10名以下の班に分けて実験を行わせている。研究室への配属にあたっては、各研究室に最大でも各学年10名程度以下になるよう配慮し、各学生に個別の研究テーマを与えて指導をしている。なお、2021年度はオンライン・オンデマンドの教材を作成し、学習支援システムを介した個々の学生からのフィードバックを可能とするシステム構築を行なった。オンライン上でブレイクアウトルームを設置するなど少人数で議論できる仕組みを導入した。

環境応用化学科では、1年次の「応用化学基礎」および3年次の「応用化学セミナー」において、教員によるきめ細かな指導をおこなうため、1教員当たり10名以下の学生数で授業を実施している。また、実験科目においては、学生が自主的に学ぶ教育内容および安全性を担保するため、1テーマ1回当たりの学生数を10名以下に絞っている。

応用植物科学科では、1,2,3年生の実験・実習科目においては実験台当たりの学生数を最大7名以下（2020,2021年度は特例的にその約半数以下）に調整し、教務助手、TAによる指導が行き届くようにしている。また、研究室配属においては、各研究室への配属人数がほぼ均等になるように調整し、指導時間や研究スペースを十分に確保できるよう配慮している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命機能学科教室会議議事録
- ・環境応用化学科基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB, IIAB テキスト、応用化学基礎・応用化学セミナーシラバス
- ・植物医科学基礎実験 I・II, 植物医科学応用実験 I・II, 植物医科学専門実験 I・II のテキスト

## 3.4⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑦に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。

・生命機能学科では、2014年度より専任教員担当科目のシラバス原稿をウェブ上で閲覧する体制を構築し、相互チェックを実施している。2017年度は、学科主任と教務担当教員が全シラバスをチェックして検証をおこなった。2015年度より、専任教員と兼任講師がそれぞれ担当する科目の内容の適切性を検討するために懇談会を年に1回実施している。2021年度はオンライン（Zoom）で開催した。

・環境応用化学科では、2014年度より、教室会議で学科の全科目についてシラバスの記載内容をチェックし、常に検証する体制を取っている。また、兼任講師が担当する科目については、採用時にシラバスの提出を求め、教室会議にて記載内容を検証している。

・応用植物科学科では、2014年度より教室会議で全科目についてシラバスの記載内容をチェックする体制を取っており、2021年度も全教員が参加してシラバスチェックをおこなった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・シラバスチェックの結果をまとめた執行部会議メンバー内でのメール文書

## 3.4⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑧に対応

はい

【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。

・学期末に実施される授業改善アンケート（FD推進センター）に、授業がシラバスの記載に沿って実施されているか、確認する項目が設定されている。

・生命機能学科では、授業改善アンケートのシラバス関係の項目の結果について教室会議で検証している。

・環境応用化学科では、専任教員の担当する授業科目に関して、学期毎にシラバス通り授業がおこなわれたかの指標としてシラバス合致度をチェックし、シラバス合致率80%未満の科目については担当教員にその理由の説明を求めている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・応用植物科学科では、授業の初回に学生にシラバスを提示して授業を進めるとともに、授業改善アンケート中の、シラバスの内容が反映されているかどうかの項目に対する回答を検証することで改善を図っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

### 3.4⑨通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021年度

#### 1.2⑥に対応

※取り組みの概要を記入。

生命科学部では、COVID-19 に対応するため、2020 年度はすべての講義をオンデマンドやオンライン講義によって実施し、実験実習科目については感染状況や感染防止対策に配慮しながら一部を対面で行った。2021 年度には多くの講義でハイフレックス形式の授業が導入され、加えて授業アシスタント制度やラーニングサポーターを活用することにより、学習効果の向上が図られた。実験科目では、感染症対策に配慮しながら対面での実習が実施された。

生命機能学科では、1, 2 年次の基礎実験・演習は、徹底した感染対策を講じた上で、主として対面で行った。2020 年度のオンライン・オンデマンドでの経験・資料の蓄積も利用し、技術的に重要なステップは、予め操作方法を動画に収め、オンライン参加の学生にも擬似的ではあるが操作方法が習得できるように工夫した。卒論研究は、各研究室がガイドラインを作成し、入室者数を制限し、入退室を記録するなど徹底した感染対策を講じて遂行した。一方で、発表会は全学年がオンラインで参加し活発な討論ができるように整備した。また、優れた研究成果をだし、卓越した発表を行った学生に対しては、コロナ禍にあっても例年と同様に優秀発表賞を授与するなどモチベーションの向上に努めた。

環境応用化学科では、研究室活動のガイドラインを作成し、研究室および実験科目の人数の制限を決めた。東館 4 階共通実験室は入口に名簿を設置し、入退出時記録をとっている。また、各研究室では、実験機の間にはビニールシートやアクリル板を設置するとともに、入退出時の記録をとっている。学生実験の運営のため、全教員参加の学生実験検討会を開催し、感染防止対策をとりながら対面式で学生実験を行うための施策を検討した。学生を少人数グループに分け、実験を行う教室を複数用意、さらにオンライン授業を併用することで「三密」を避けた。

応用植物科学科では、一部専門科目の講義にオンラインの利点を活かしたリアルタイムクイズや関連動画視聴などを取り入れ、昨年度以上に聴講を楽しめる工夫を凝らすとともに、学習支援システムのテスト/アンケート機能による試験を行い、成績評価に用いた。また学生実験においては学習支援システムを通じて動画や画像を多数提供し、極力実際の実験をイメージしながら課題に取り組めるよう努めた。卒業研究発表会は対面と Zoom を用いたハイフレックス形式で実施し、優れた発表に対しては最優秀・優秀発表賞を授与した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・授業科目シラバス

### 3.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

#### 3.5①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021年度 1.3①に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた

【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。

・成績評価の方法および基準は、期末試験や小テスト、レポートなどの各要素の配分も含めてシラバスに明記され、学生へ周知されている。これらをもとに、授業の内容に応じて適切な単位認定が行われている。

・成績評価結果については、学生からの異議申し立てが可能であり、そのシステムも確立されている。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・生命科学部履修の手引き  
・授業科目シラバス

#### 3.5②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。2021年度 1.3②に対応

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。



A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
講義科目については概ね各教員に任せられているが、成績評価方針を学生の個人情報の問題を含めて検討している。生命機能学科では、全教員が担当する研究・実験・演習・科学英語科目については、予め学生に公表した基準に沿って学習態度や達成度等を点数化し、教室会議できめ細かく検討した上で成績評価を行っている。環境応用化学科では、1年次の導入教育科目および1～3年次の実験科目において厳格な採点基準を設けて採点をおこない、最終的に成績判定会議で詳細に検討し成績評価をおこなっている。また、各教員がおこなう授業報告においても、各科目の採点基準の確認をおこなっている。応用植物科学科では、特に実験・実習科目、植物医科学インターンシップの成績評価について全教員が参加する教員会議で協議・確認し、適正に評価している。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・授業科目シラバス ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

## 3.5③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.3③に対応

はい
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。
・生命科学部ではすべての学科の就職状況を集約し、全体像を学部パンフレットに記載している。 ・生命機能学科では、就職担当教員が学生の卒業後の進路について適宜調査し、教室会議における報告を通して、進学状況および就職状況は、全専任教員に共有されている。 ・環境応用化学科では、学生の卒業後の進路についてゼミ単位で、就職担当教員が適宜調査し、教室会議で報告しており、就職状況および進学状況は全専任教員が把握している。 ・応用植物科学科では、3年生は夏休み前に研究室に配属され、担当教員はゼミ学生の就職内定や進学情報をリアルタイムで把握している。この情報は進路担当教員に報告し、集約された進路情報は迅速に学科全教員に伝達するシステムをとっている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・生命科学部パンフレット ・各学科教室会議（教員会議）議事録 ・各学科進路調査

## 3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

## 3.6①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.4①に対応

はい
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。
・生命科学部では各学科から進級状況の報告を受け、教授会で承認している。 ・生命機能学科では、実験・演習・科学英語の成績について、全教員が参加する教室会議において、成績分布に配慮しつつ協議した上で判定している。また、学期末と年度末には、特に修得単位が少なく進級が危ぶまれる学生や、成績の低下した学生を抽出して個別に指導している。 ・環境応用化学科では、実験科目の成績分布について検証し、全教員による成績判定をおこなっている。また、教室会議でおこなわれている授業報告を通して、各科目の成績分布および学生の理解度について全教員が情報を共有している。さらに年度末の教室会議において、全教員により提供された情報をもとに進級・卒業の判定をおこなっている。 ・応用植物科学科では、実践的教育の要である実験科目について、全教員による成績判定を行っているほか、樹木医補、自然再生士補の認定養成機関であることから、資格取得に必要な科目の履修状況を常時把握・指導している。進級や卒業については、提供される情報を基に、教室会議で検討し個別指導している。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・生命科学部教授会議事録
- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

3.6②学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

生命機能学科では、研究室配属授業（実験・演習・科学英語）の成績評価、発表会の成績を全教員が採点・集計している。環境応用化学科では、3年次の「応用化学セミナー」および4年次の「卒業研究」において、研究報告やディスカッションを定期的におこなうことで、学習成果の進展をチェックしている。また、卒業研究発表会では、全教員が発表を聴講し、成績判定をおこなっている。応用植物科学科では、卒業研究発表会において、全教員による発表内容・態度の採点をおこない、相互に採点内容を確認することで、学習成果評価を適切に行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教室会議議事録

3.6③学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021年度1.4③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

生命機能学科では、1～2年次の実験・演習・科学英語については統一テストを行い、各学生の達成度を測っている。2～4年次に各研究室で取り組む課題研究では、その集大成となる「卒業論文」について、全専任教員が全ての口頭発表を審査・採点して、判定会議において採点結果をもとに評価を決定している。環境応用化学科では、授業科目の到達目標に関して、学期末定期試験において評価をおこなう。学期末定期試験が実施されない科目に関しては、授業時間内に課題を課し、回答結果を元に毎回評価をおこなうなどの方法により、学生の学習成果の測定をおこなっている。さらに、集中講義科目においては、授業時間内や授業終了後の一定期間にレポートを課すなどして適宜評価をおこなうことにより達成度評価を適切におこなっている。応用植物科学科では、GPAやTOEICの年次比較のほか、実験・実習科目におけるレポート内容の確認・比較を行っている。また毎年、技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補の資格取得状況、学生による学会発表などを確認している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・生命機能学科卒業論文発表要旨集、統一テスト
- ・環境応用化学科卒業論文発表要旨集

3.6④学習成果を可視化していますか。2021年度1.4④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等

- ・生命機能学科では、1～2年次に実験・演習・科学英語に関する統一テストを行い、定量性をもつ達成度として可視化している。また、学生による学会発表を推奨し、学会発表数を教育成果の一つとしており、2015年度より制定された理系学部学生国内学会発表補助を積極的に利用している。
- ・環境応用化学科では、実験科目のレポート、演習、実習それぞれの点数や成績分布について、詳細なデータをまとめて成績判定会議で報告し議論している。また、各教員の授業報告においては、各科目の成績分布を報告し、議論をおこな

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>っている。また、卒業研究発表においては、「卒業論文要旨集」をとりまとめている。さらに、公的資格取得者などを表彰する生命科学部奨励賞の取り組みを通じて、資格取得者数の年次変化を確認している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・応用植物科学科では、年度ごとに技術士一次試験合格者数、樹木医補・自然再生士補登録者数を把握して、年次変動を確認している。また毎年度末には、教室会議において、学生の単位取得状況に関するデータを基に、学生指導に関する検討を行い、その方針に則った指導に全教員が取り組んでいる。</li> </ul> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> </ul>
--

3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

3.7①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021年度1.5①に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p> <p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部では各学科で兼任講師懇談会を年1回開催し、兼任講師の担当講義科目についても教育成果について検証し、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。2020年度はCOVID-19の影響で兼任講師懇談会をZoom等により実施し、授業等に関する意見を募った。</li> <li>・生命機能学科では、入学時のプレースメントテストとTOEICの成績を、1,2年次の基礎実験・演習・科学英語科目で実施する統一小テストおよび期末テストの結果と比較・分析し、教育効果について議論・検証している。また、3年次の実験・演習・科学英語科目について学生にアンケートを行い、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。</li> <li>・環境応用化学科では、ほぼ毎週開かれる教室会議で教育内容、実施の問題点や教育成果について継続的に検証している。また、卒業研究での取り組みをより充実したものにするために、全年次の進級要件の見直しを行い、2020年度の新入生から適用した。</li> <li>・応用植物科学科では、授業改善アンケート以外に学科独自のアンケート調査を実施し、教員会議で結果を分析している。また、毎月2回程度開催される教員会議の中で、試験の成績や資格取得者数など教育成果に関する情報を共有化し検証しているほか、学業不振学生について原因の分析、保護者面談の実施を含めた対策を定期的に議論している。</li> </ul> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部教授会議事録</li> <li>・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> <li>・生命機能学科アンケート調査</li> <li>・環境応用化学科化学系教員懇談会議事録</li> <li>・環境応用化学科履修の手引き</li> <li>・応用植物科学科アンケート調査</li> </ul>
---

3.7②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021年度1.5②に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p> <p>【利用方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業改善アンケートの自由記述欄の詳細情報開示請求により、学部執行部が学部の全ての教養科目と専門科目について、授業の実施状況を確認している。</li> <li>・生命機能学科では、学科独自の授業アンケートを実施し、集計結果を授業の検証と改善に役立てている。また、全学の授業改善アンケートの結果についても活用するよう各教員に確認している。</li> </ul>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>・環境応用化学科では、春秋学期の全学授業改善アンケートの集計結果を解析し、授業に対する興味、理解度等を知るための手がかりとしている。さらに、毎年4月に独自に1年生に対し、新入生アンケートを実施している。新入生アンケートを有効活用し、新入生受け入れに関する検討を行っている。</p> <p>・応用植物科学科では、授業改善アンケートや学生アンケートを分析し、学期の終わりや次の学期の初めの間に授業改善の目安として用いているとともに、教員間で適宜情報交換しながら、学生の意見を取り入れて授業の改善に役立てている。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> <li>・生命機能学科アンケート調査</li> <li>・環境応用化学科アンケート調査</li> <li>・応用植物科学科アンケート調査</li> </ul>

### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>・教養教育と専門教育の連携を強めるために、2018年度に教養・専門教育連携委員会を発足させ、2019年度には情報科学部・理工学部・生命科学部の3学部の教養担当教員と専門科目担当教員が参加する基盤教育タスクフォース委員会が開催された。2020・2021年度も教養・専門教育連携委員会を開催し、教養教育と専門教育の連携についての問題点の共有や今後の課題について話し合った。今後も引き続き教養・専門教育連携委員会を開催し、生命科学部にふさわしい教養教育の再編成を検討する予定である。</p> <p>・2021年度も引き続きCOVID-19の影響下であったが、多くの講義でハイフレックス形式の授業が導入され、また授業アシスタント制度やラーニングサポーターを活用することにより、学習効果の向上が図られた。実験科目では学生数を半分に抑制するなどの配慮をしながら対面での実習が実施され、理系学部としての教育効果の維持に努めた。</p>

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>COVID-19の影響により、2021年度も対面での授業が困難な状況であった。各学科ともオンラインやハイフレックスの利点を生かした教育を行っているが、対面指導が必要な実験実習科目に関しては教育上の目的を十分に達成できているとは言い難い。2022年度は、感染状況に配慮しながら対面授業の機会を増やし、学習効果の改善につなげていく。</p>

### 【教育課程・学習成果の評価】

<p>&lt;①方針の設定に関すること (3.1~3.2) &gt;</p> <p>生命科学部の学位授与方針は、学部全体で共通に求める項目に加え、各学科の特性に応じた方針が個別に設定されている。教育課程の編成・実施方針についても、各学科ごとの見直し・改訂や、カリキュラムの改訂、入試制度の変更への対応などが適切に行われており、その内容は教授会を通じて学部全体でも検証されている。教育効果についても、大学院進学数や資格の取得者数・登録者数など、それぞれの学科の特性に応じて適切なものが選択されており、自己点検の枠組みの中で着実に質の保証を行っている。</p> <p>&lt;②教育課程・教育内容に関すること (3.3) &gt;</p> <p>生命科学部では、学生自身が自ら学ぶ自立性を涵養し、学習や研究に対するモチベーションを高める工夫と取り組みが随所に見られる。学習課程においては、理系学部の特性として学年進行に伴う順次性を持ったカリキュラムが構成されている上に、1年次の実験・演習科目で学生が問題意識をもって学ぶことを狙っている。さらに各学科ごとの特性に応じた</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

専門性に通じる内容を各学年に配置することで、専門分野に繋がる教育体制が取られている。生命機能学科において研究に対する意欲の高い学生を2年次から研究室に配属する点や、環境応用化学科において各学年に実験・演習を設定したり、応用植物科学科で樹木医補、自然再生士補などの専門に特化した資格取得向けの科目を開講している点は特筆すべき点である。インタビューによると、生命機能学科の2年次研究室配属は現在40%ほどの学生が利用しており、これらの学生のみならず、上級生にもよい影響を与えている。利用しない学生との指導上の差別が生じないような配慮もなされている。また、「研究室」に学生が増加することによるスペースの問題は、とりわけCOVID-19下では大きくなったが、在室時間の調整を行っているとのことで、収容学生数を限定する適切な対応がなされている。さらに、優秀な卒論や資格の合格に対して表彰を行い、学生の学びの意欲を上げる努力も怠っていない点は注目に値する。高大接続の観点では、入学時のプレースメントテストや入学前教育、初年次専門科目の設定などの取り組みで、大学レベルの生命科学の学びに繋げる努力がなされている。また、学生の学修状況や基礎学力の評価を通じて、リメディアルや専門と基礎のつながりを考慮したカリキュラム改革に取り組んでいる点は、学部の自己評価とおり優れた取り組みであると考えられる。国際性の涵養や社会的・職業的自律を図るためのキャリア教育も適切に行われている。

### <③教育方法に関すること (3.4) >

生命科学部では、入学次・学年別・留学生等のそれぞれのガイダンスにおいて理系教養科目などの全般的な学習指導を行うとともに、学科毎に各学科の特性にあった学習指導が効果的に行われている。また、オフィスアワーや実験・演習科目、卒業研究を中心として、学生状況の把握と学習指導を行う体制が構築されている。また、各学科に学生問題を担当する教員を置き、課題の提出状況などをモニタすることで、成績不振学生等の対応も行われている。

学習時間の確保についても、事前学習課題や小テスト、実習の準備などで配慮されており、年間および学期毎の履修登録単位数の上限を設定することと合わせて学習の質を保証するようになっている。授業形態については実験・卒業研究を中心とした各学科の専門分野の特性を生かすためのものが導入されている。また学生数についても英語、実験、卒業研究などについて適正数になるように配慮されている。さらに、オンライン・映像コンテンツの活用により内容や人数の観点で効果的な授業形態をとる取り組みも進められている。シラバスの作成や検証についても教室会議等により各学科で適切に行われている。

COVID-19 対応については、学部の特性として実験が欠かせないことから大きな苦労があったことと推察されるが、研究室・学科・学部のそれぞれのレベルで適切な感染対策やガイドラインの作成を行い、安全に配慮しながら十分な学習効果が確保されたことは特筆すべきである。

### <④学習成果・教育改善に関すること (3.5~3.7) >

生命科学部の成績評価の方法と基準はシラバスに明記され、成績評価と単位認定を厳格に行うためのシステムが各学科の取り組みを中心として確立されている。学生の就職状況は、就職担当教員または進路担当教員がとりまとめ、教室会議を通じて学科で把握している。成績分布や進級状況は学科単位で把握され、進級・卒業判定や個別指導などの必要となる場面で活用されている。学習成果の測定と把握評価方法に関しては、セミナーや卒業研究の発表会において全教員が発表を聴講し採点に携わることで適切に行っている。学習成果の可視化は、統一テスト、実験科目のレポート、演習、実習等の成績分布や、学会発表数、資格試験合格者数等により行われており、学習成果の検証は教室会議等で定期的に行われている。授業改善アンケートについては、自由記述欄の詳細情報をもとに学部執行部が授業の実施状況を把握している。また、一部の学科で実施されている独自アンケートの結果も含めて分析されており、各学科での学習成果のみならず、生命機能学科での2年次配属に関する各種情報把握、応用植物科学科での資格取得促進に向けた関連科目の効果の検証、さらには個別の学生が抱える学習上の問題の掘り起こしと、広い意味での手厚い学生対応への一助として活用されている。

## 4 学生の受け入れ

### (1) 点検・評価項目における現状

#### 4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

4.1①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。2018

年度 4.1①に対応

はい

#### 4.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

4.2①学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

学者選抜をどのように公正に実施していますか。 **新規**

※取り組み概要を記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般選抜は、A 方式入試、T 日程入試、英語外部試験利用入試、および大学入学共通テスト利用入試によって実施しており、高等学校卒業程度の学力水準を前提に、生命科学部における修学・研究に必要な学力を評価している。</li> <li>・学校推薦型選抜は、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試によって実施しており、出願書類及び面接等によって、生命科学部における修学・研究に必要な基礎的な学力と、自然科学への学習意欲を評価している。</li> <li>・外国人留学生入試、および帰国生入試では、出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と生命科学部における修学・研究に必要な基礎学力を有すること、自然科学における問題解決への意欲と生命科学部の各学科への志望意思を確認している。</li> </ul> <p>これら入試制度によって、多様な学生募集の経路を確保するとともに、生命科学部の受け入れ方針に沿った入学者を公正に選抜する体制を整備している。</p>
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学 入学試験要項</li> </ul>

4.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

4.3①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。 **2018年度4.2①に対応**

はい
※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。
過去5年間（2017～2021年度）の収容定員充足率の平均は1.02倍であり、概ね適正な充足率となっている。入学者数が定員を超過した場合には、クラス分けを行って講義受講者数の適正化を行うとともに、学科ごとに超過分に依拠して予算措置を講ずるなどして実験実習に支障が出ないようにしている。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教授会資料</li> </ul>

4.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

4.4①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。 **2018年度4.3①に対応**

A：従来通り効果的に取り組むことができた
※検証体制及び検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部執行部と入学センターの情報交換会により、入試結果を分析・検証するとともに、得られた分析結果を各学科が翌年以降の入試改善のために利用している。</li> <li>・各学科の高大連携委員が入試経路（一般、センター、推薦）ごとに学生のその後の成績等を追跡し、入学選抜の適切性を検証するとともに、指定校設定を見直すなどの改善を行っている。</li> <li>・応用植物科学科では、指定校推薦で入学した学生についてGPAやTOEIC-IP、プレースメントテスト等の成績を追跡し、指定校設定を見直している。</li> </ul>
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学センター情報交換会資料</li> <li>・各学科教室会議（教員会議）議事録</li> <li>・指定校推薦見直し委員会開催記録・議事録</li> </ul>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考え

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

られる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学者のミスマッチを防ぐために、執行部で3付属校を訪問し、大学が期待する学生像について説明した。</li> <li>・付属校の理科に関する推薦要件を見直し理系コースのみの生徒が進学するような要件に変更し、2018年度高校入学者から適用することとした。</li> <li>・法政二高で化学の模擬授業をおこなうとともに、理系進路説明会に参加し、教員とOBによる学部説明会をおこなった。</li> <li>・理系4学部（デ工、情報、理工、生命）と3付属校理科教員の懇談会で学部から付属校側に学部の要望を伝えるなど情報交換をおこなった。</li> </ul>

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度の入試では、3月末時点で定員以上の手続き者数を確保したものの、その後の辞退により入学者数は定員の0.97倍であった。安定的に適正な入学者数を確保する方策を入学センターと連携しながら、検討する必要がある。</li> </ul>

**【学生の受け入れの評価】**

<p>学生の受け入れ方針は、生命科学部共通のもの各学科の特性に応じた学科別のものが設定され、求める学生像が明確にされている。定員充足率については、過去5年(2017～2021年度)平均で1.02であり、適切な水準で維持されている。入学者選抜の結果については、入試経路別にGPAやプレースメントテストなどの成績で追跡調査を行い、指定校推薦を見直すなど、入学者の質の維持・向上に努めている。付属校との連携については、学部執行部が3校を訪問し大学が期待する学生像について説明したり、理系4学部と3付属校教員の懇談会を実施したりすることで、より良い連携に向けた取り組みが行われている。</p>
--

**5 教員・教員組織**

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

5.1①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。2018年度5.1①に対応

はい
<p><b>【根拠資料】</b>※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部教員審査内規</li> <li>・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関する内規</li> <li>・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関するガイドライン</li> </ul>

5.1②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。2018年度5.1②に対応

<p><b>【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】</b>※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部執行部は学部長、教授会主任、教授会副主任1名ずつよりなる。</li> <li>・教学関係を含め重要な案件は、各学科主任および学部担当事務主任を含めた執行部会議での議を経た後に、教授会に上程して改めて議論し、決議する体制をとっている。</li> <li>・学科の独自の問題に関しては、各学科の責任で検討が行われ、原則として全教員が参加する教室会議により意志決定がなされる。</li> <li>・教養教育を担う組織として小金井リベラルアーツセンターがあり、学部組織と連携して教養教育の責務を担っている。</li> </ul> <p><b>【明示方法】</b>※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部内規集</li> </ul>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部内規集
- ・生命科学部教授会規程
- ・生命科学部執行部会議・教授会議事録

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

5.2①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。2018年度5.2①に対応

はい

※教員像及び教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

生命科学部には体育、英語、数学の教養教員が所属し、生命科学部にふさわしい教養教育と、専門教育にあたる専任教員と密接な連携をとって教育に当たっている。

生命機能学科の分野別の教員数は、2022年5月現在、ゲノム分野が3名、蛋白質分野が2名、細胞分野が4名、応用数学分野が1名、グローバル化担当が1名、理科教育・教職課程担当が1名の配置である。今後の大学院卒や定年交代の人事、任期付き教員の期限後の人事に際しては、分野別の配置のバランスを保つよう配慮していく予定である。環境応用化学学科では、3つのコース、すなわち「物質創製化学コース」、「グリーンケミストリコース」および「環境化学工学コース」に分かれ、それぞれ、物理化学、有機化学、無機化学、環境化学および化学工学の5分野に対応する教員が担当している。今後、講義科目と実験科目の連携を密にして教育体制をより一層充実させるために、教務助手の定員枠の拡充が望まれる。応用植物科学科では、植物医科学を支える分野である菌類学、細菌学、ウイルス学、害虫学、生理学、社会科学の各分野の専門家からなる教員体制としている。このうち、2019年度末の害虫学分野の教員の退職に伴い、2020年度から同じく害虫学分野の専任教員を新規採用し、植物医科学分野の教育・研究レベルを損なわないようにした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類
- ・生命科学部教員一覧
- ・法政大学ホームページ
- ・学部・研究科・各学科のホームページ・パンフレット
- ・2017年度専任教員数一覧

5.2②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。2018年度5.2②に対応

はい

※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

教員組織は、学部教員が大学院の主要科目を担当し研究指導を行う体制であり、連携が取れている。学部時代の研究テーマを大学院でも続けて行うことにより、高度な研究を行って学会発表するなど成果を挙げている。また、担当教員が許可することで学部4年生が大学院科目を「先取り」受講することが可能であり、連続性のある教育体制となっている。各学科においてそれぞれの教員が大学院業務を分担し、教員や大学院修了生・上級生による大学院進学に関する説明会の実施など大学院教育との連携を推進している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院 理工学・工学研究科要項
- ・生命機能学専攻・応用化学専攻入試結果

5.2③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。2018年度5.2③に対応

はい

【特記事項】※ない場合は「特になし」と記入。

生命科学部では教員の定年による交代の際に、年齢を配慮した後任人事が行われてきたことにより、バランスの取れた年齢構成となっている。引き続き、後任人事採用に際して年齢が偏らないように配慮していく予定である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。



・生命科学部教員一覧

### 5.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

#### 5.3①各種規程は整備されていますか。2018年度5.3①に対応

はい

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・生命科学部教員審査内規
- ・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関する内規
- ・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関するガイドライン

#### 5.3②規程の運用は適切に行われていますか。2018年度5.3②に対応

はい

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することも可。

- ・教員の採用（募集・任免）および昇格に関する審査は、「生命科学部教員審査内規」に従って、採用は原則公募によるものとする。
- ・候補者については推薦委員会（5名以上の専任教員で構成）および人事委員会（各学科2名ずつの専任教員で構成され、当該学科以外の教員が委員長となる）を通じて二段階の精査を行う。
- ・最終的に教授会で投票による議決（当該職位以上の教員が投票権をもつ）を行っている。

### 5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

#### 5.4①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。2021年度2.1①に対応

S：さらに改善することができた

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・全学の「FD推進センター」で実施される授業改善アンケートに加え、各学科独自に授業アンケートを実施。
- ・2011年度より授業公開を実施。法政大学の全教職員に対して公開しており、教員が相互参観を行うとともに、教務助手・特任教育技術員・教育技術嘱託など技術系職員が参観。
- ・2019年度には、任期付教員を含めて学部教員を対象としてFD研修会を実施し、学習支援システム等のICT活用に関する講習を行った。
- ・FDアンケート等の結果を各教員にフィードバックし、授業の質の改善に活用するシステムを整備。
- ・シラバスチェックシステムを各学科で整備。
- ・2021年度には、教授会の時間帯を利用してFD活動を複数回実施し、授業方法を改善するための組織的な取り組みを行った。

【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・春学期と秋学期の2回、全教員を対象として授業公開を実施した。
- ・シラバスチェック：年度末にかけて、学部で開講されている全専門科目について、生命機能学科では学科主任と教務担当（代理）の2名が、環境応用化学科と応用植物科学科では教員全員がシラバスチェックを実施した。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・毎回の教授会の際に教育開発・学習支援センター長からFD推進活動について詳細な説明を受けており、教員の資質向上や教育方法の改善に努めている。
- ・COVID-19の影響下ではあったものの、春学期・秋学期とも全教員を対象として授業公開を行った。新たな取り組みとして、Googleフォームとスプレッドシートを用いて授業相互参観の申請を電子化し、同時に授業の実施形態を調査できる体制を整えた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科授業アンケート
- ・2021年度授業相互参観実施報告書

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・執行部会議，教授会資料
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録

5. 4②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。2021年度2.1②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

生命科学部では、研究活動や社会連携・社会貢献に関する現状の活動が継続発展できるよう、ノウハウの共有や伝承を行える枠組みを構築するための取り組みを行っている。その取り組みの一環として、2019年度に着任した教員による新任教員セミナーの開催や法政科学技術フォーラムへの参加を行った。さらに、2018年度に小金井3学部による研究交流セミナーがスタートし、2019年度は春・秋2回の研究交流セミナーを開催した。COVID-19の影響により、2020年度の研究交流セミナーの開催が危惧されていたが、2021年3月にオンラインにて開催した。

生命機能学科では、FB（生命機能学科）セミナーを2017年度から開催し、研究講演と懇談会を実施して最先端の研究を共有し、研究活動の活性化を図っている。

環境応用化学科では、外部講師を招いて開催してきた「環境応用化学セミナー」を2021年度は4回（第18～21）回開催した。今年度から化学の先端的な内容とともに、他分野の先端的あるいは産業的に重要な事柄に関する講演も取り入れて、研究・教育活動に活かしている。また、「エコプロ2021」に出展し、2017年度から連続して学科の研究活動を広く一般に公開する取り組みを継続している。

応用植物科学科では、2年生必修科目のインターンシップによる社会体験、また学科内に開設している植物医科学センターの活動（植物病害虫診断事業）に参加させることで社会との接点を認識させ外部機関との連携の重要性が理解できる枠組みを整備している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究交流セミナー開催資料
- ・法政科学技術フォーラム開催資料
- ・FB（生命機能学科）セミナー案内
- ・環境応用化学セミナー案内
- ・環境応用化学科エコプロ2021出展資料
- ・応用植物科学科教員会議議事録

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

・春学期と秋学期にほぼ一ヶ月にわたって全教員の全科目を大学の全教職員に対して授業公開しており、その取り組みが高く評価されている。また、毎回の教授会の際に教育開発・学習支援センター長からFD推進活動について詳細な説明を受けており、教員の資質向上や教育方法の改善に努めている。今後もこれらの取り組みを継続していく予定である。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

・2022年度も対面でのセミナーなどが開催しにくい情勢であるが、オンラインやハイフレックスを活用して、FD活動や社会貢献活動を継続的に進めていく予定である。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

## 【教員・教員組織の評価】

生命科学部では、採用・昇格に関する求める教員像および教員組織の編制方針が、学科単位で明確に定められている。また、学部執行部、学科主任、執行部会議、教室会議、教授会といった役割の分担と責任の所在も明確にされている。教員の配置に関しては、学部として体育・英語・数学などの教養教育や理科教育・教職を担当する教員を配しつつ、各学科において、教員の専門分野の偏りが出ないようなバランスに配慮した採用が行われている。大学院教育については、学部教員が大学院の主要科目を担当し研究指導を行うことから、教員組織の連携は自然に取れる体制となっている。さらに、学生の研究指導での連続性に加えて、大学院科目の先取り履修制度など、学生の教育の観点での連携も考慮されている。

年齢構成については教員の定年による交代を通じてバランスが取れた年齢構成となっている。募集・採用・承認に関わる各種の規程は整備され、規程の運用も適切に行われている。FD については、任期付き教員を含めた学部教員に対するFD 研修会なども積極的に行われているが、中でも大学の全教職員に対する授業公開が行われ、教員の相互参観だけでなく技術系職員も参加したFD 活動が行われている点は特筆に値する。また、研究活動や社会貢献の観点では、教員セミナーや法政科学技術フォーラム、研究交流セミナーなどを通じてその活性化を図っている。

## 6 学生支援

## (1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

6.1①卒業・卒業保留・留年者及び休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。2018年度6.1①に対応

はい

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・生命科学部では、執行部会議・教授会で卒業・卒業保留・留年者および休・退学者が報告され、状況が把握されている。
- ・生命科学部では、卒業論文の提出および発表が学位取得に必須であり、全教員の判定のもとに適切に行われている。
- ・退学、休学については教室会議で報告され、留年する学生については、年度末の教室会議において確認され、次年度の留級生ガイダンス時に適切な指導を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・執行部会議，教授会議事録
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録

6.1②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。2018年度6.1②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。

生命科学部全教員がオフィスアワーを設定しており、その時間帯は教員に対して学生が自由に相談できるようになっている。また、学生がより気軽に相談できるように、上級生が下級生を教えるチューター制度を設定している。さらに実験実習科目を中心として大学院生が学部生をきめ細やかにサポートするティーチングアシスタント制度も実施している。生命機能学科では、1, 2, 3年生のクラス担任と実験・演習科目の担当教員を置き、学生と高頻度で顔を合わせ、教員側の窓口としての役割を担っている。また、これとは別に学生担当教員が個々の学生の成績などを調査し、規定単位の取得が危ぶまれる学生や成績が低下しつつある学生などについて、面談や必要に応じた保護者への連絡などを行い、学生が留級に至らないようサポートを行っている。環境応用化学科では3, 4年次での指導教員の割り当てに加えて、1年次には8名程度ごとのクラス担任制度を導入している。また、特任教育技術員が主要講義科目、実験・演習科目に出席し、それぞれの教育内容を把握しており、教員だけでなく特任教育技術員も学生からの質問に対応できる体制を整えている。応用植物科学科では、1, 2, 3年生のクラス担任と実験・実習科目の担当教員を割り当て、高頻度かつ緊密に指導している。特に、1年生に対する生産実習においては、作物の病害虫発生調査・管理等を1時限前に教員、特任教育技術員、教務助手が高頻度に指導している。また、教員会議において、成績不良学生、休みがちな学生の情報を共有し、成績調査、個人面談などの就学支援サポートを行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・学科教室会議（教員会議）議事録
- ・応用化学基礎シラバス，基礎応用化学実験，応用化学実験 IAB, IIAB テキスト

6.1③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。2018年度6.1③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【成績不振学生への対応体制及び対応内容】※箇条書きで記入。

- ・生命科学部では、2014年度より「累積GPAが1.0以下または学習態度や達成度に重大な問題があると認められる者」を成績不振学生と定義し、とくに注意して対応している。「学習態度や達成度」に関しては、修得単位数、授業への出席率、レポート等課題提出状況、GPAをもとにして総合的に判断する。とくに、必修の実験実習科目の出席状況やレポート等課題提出の状況は、学生の学習意欲と理解度をリアルタイムに反映する重要な指標と考えているため、学期途中にも適宜モニターして対応する。この対応のため、各学科に学生担当教員をおいている。
- ・また、学習態度、学習能力に大きな問題を抱える学生に対して、学科だけではなく、学務課、学生センター、学生相談室、障害学生支援室と連携する体制を整え、学習に困難を抱える学生に対して多角的な観点から手厚くサポートしている。
- ・生命機能学科では、学生担当教員は、学科主任等と連携して、上述の基準から問題となる学生と留学生についての調査・対応を主導する。当該学生に対しては、メールもしくは文書による本人への注意喚起、個人面談、郵送による保証人への通知を含めた個別指導を行う。学生担当教員と基礎実験演習担当教員を中心に、成績が不振な学生の状況を教室会議で共有するとともに、必要に応じて個別に面接を行い、きめ細かい指導をしている。また、成績不振など問題を抱える学生の状況は出来る限り学務課とも共有している。
- ・環境応用化学学科では、成績不振な学生の情報を教員間で共有し、必要に応じて各教員が面談おこなうなど適切な指導をおこなっている。また、年度始めに留級生ガイダンスを実施し、成績不振な学生へのサポートをおこなっている。
- ・応用植物科学科では、教室会議で「GPA1.0以下の学生、実験実習（全14回）で4回以上欠席した学生、実験実習でのレポート未提出者、1～3年生の進級要件を満たしそわない単位少修得者、4年生の卒業要件不足見込み者」などを成績不振学生としてリストアップし、全教員で情報を共有した上で、優先的にケアしている。また、「学生問題担当教員」を設置し、各学年担当教員2名、さらに必要に応じて学務課・学生生活とも連絡をとりつつ、成績不振者を指導している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・環境応用化学科留級生ガイダンス案内

6.1④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。2018年度6.1④に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

生命科学部では、例年選出するチューターの中から、国際ボランティア意識の高い学生を、主に留学生を対象とするチューターとして設定した。2021年度は、COVID-19の影響もあり留学生との懇談会は開催を自粛したが、Hoppiiを用いて修学支援の呼びかけを行った。生命機能学科では、日本語能力を含めた様々な背景をもつ留学生に学科主任が中心となって個別に修学支援をおこなった。その情報は学科会議で共有され、必要に応じて留学生の保護者に母国語に翻訳した手紙で修学状況を報告した。環境応用化学科では留学生について教室会議で情報共有を行い、各科目でのサポートに活かしている。応用植物科学科では、2016年度入学のベトナム人留学生（博士課程）に対して、引き続き、学科を挙げて修学支援に力を入れている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部教授会議事録</li> <li>・小金井企画・調整会議議事録</li> <li>・小金井学生相談・支援室運営委員会議事録</li> <li>・学科教室会議（教員会議）議事録</li> </ul>
--

6.1⑤学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。2018年度6.1⑤に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた
<p>※学生の生活相談に関する取り組みの概要を記入。</p> <p>生命科学部では副主任が学生問題担当の窓口となり、学生生活課と連携しながら、学生から相談事があった場合に対応している。必要に応じて相談内容を執行部3役のミーティングで学部長、教授会主任に報告し、情報共有している。生命機能学科では、学生担当教員と学科主任および各学年担当教員が学生からの生活相談に対応する体制をとっている。また、その内容について必要なものは、学科内の会議で共有し、最適な対応がとれる体制にしている。環境応用化学科では「応用化学基礎」、「応用化学セミナー」、「卒業研究」において、指導教員が親身に相談にのっている。応用植物科学科では、学生から各学年担当教員に挙げられた相談内容は、学科教員会議において学科教員で共有し、対応を議論したのち、学年担当教員から学生への指導をおこなっている。相談内容が教員では対応が難しい場合は、学生相談室への相談を指導している。いずれの学科においても、学生相談室のカウンセラーによるメンタルヘルス等に関する講演を主に1年生向けに行っている。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生相談室カウンセラーの講義資料（パワーポイント）</li> <li>・学生相談室のパンフレット</li> </ul>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・主に留学生を対象とするチューターを設定した。</li> <li>・学生相談室との連携を強化した。</li> </ul>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし

【学生支援の評価】

<p>生命科学部の卒業・卒業保留・留年者および休・退学者については、執行部会議と教授会で報告され、全専任教員により状況が把握されている。修学支援については、教員のオフィスアワー、学部上級生による学生チューター、院生によるTA制度など、教職員および学生の複数のチャネルからサポートする体制がとられている。成績不振者に対しては、一定の基準を設定して重点対応を取る体勢がつけられている。特に各学科に学生担当教員において、学生の学習意欲や理解度を適切に把握する体制が取られている点は特筆すべきである。また、学務課、学生センター、学生相談室、障害者支援室と連携する体制も確立されている。</p> <p>外国人留学生の修学支援については、留学生を対象とするチューターを設定して対応にあたっている。また、COVID-19</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

下においては、学科主任が中心となり丁寧な個別支援が行われている。さらに、全般的な学生の生活相談については、教授会副主任、学生担当教員、学科主任、各学年担当教員、指導教員と多面的に対応できるような体制が取られている。

## 7 教育研究等環境

### (1) 点検・評価項目における現状

#### 7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

7.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフ、授業支援アシスタント、ラーニングサポーター等を配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018 年度 7.1①に  
対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

実験・演習等において学生に対する TA の教育支援体制が設けられている。また特任教員技術員が教育研究支援を行っているが、2018 年度からは研究も行う教務助手が学生に対する高度な支援を行う体制を整備した。また、2021 年にハイフレックス方式の授業が始まったが、授業支援アシスタントやラーニングサポーターの支援によって学習効果の向上が図られた。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・教務助手 規定

#### 7.1②学部 (学科) として、学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

生命機能学科では、ラーニングサポーターによる新入生への学習指導をオンライン上でできるように整備した。また、研究室配属学生に対しては、オンラインでの効率的な学習と研究が可能となるように各研究室でスケジュール管理等の工夫がなされた。

環境応用化学学科では、外部講師を招いて開催してきた「環境応用化学セミナー」を 2021 年度は 4 回 (第 18～21 回) 開催した。三密を避けるためにオンライン開催としたことにより、セミナーに参加しやすくなって、参加人数が大幅に増加している。

応用植物科学科では、対面でのガイダンスを開催できなかった 1 年生 (現 2 年生) を中心として担任によるメールでの問い合わせへの細やかな対応を心掛け、履修等の疑問や学生生活の不安を軽減できるよう努めた。また社会貢献として、植物医科学センターにおける病虫害診断についても、対応可能な人員等に十分配慮しながら、活動状況を開示し、極力受け入れを継続した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・環境応用化学セミナー案内  
・植物医科学センターホームページ

### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

・技術職の新たな職種として教務助手制度を整備し、より充実した教育支援体制を整えた。

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画 (既に実施している場合にはその進捗状況も含めて) をあわせて記入してく

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

ださい。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・教務助手の採用枠は、特任教育技術員と技術嘱託を合わせた勤務時間数によって限定されている。しかし、生命科学部の高度な教育を実践するには、少なくとも各研究室に一人の採用枠が必要である。

**【教育研究等環境の評価】**

生命科学部では、実験・実習科目の TA による教育支援に加え、特任教育技術員による教育研究支援、研究も行う教務助手による高度な学生支援といった支援体制の充実化が行われている。インタビューによると、教務助手の役割が大きい一方で、負担もまた大きくなっている点を課題として認識しており、解決は容易ではないものの今後も取り得る対策を模索するとのことだった。また、COVID-19 への対応を起点に、授業支援アシスタントやラーニングサポーターによるハフレックス講義の支援や新入生向けのオンラインでの学習指導などの取り組みが進められている。
--

**8 社会貢献・社会連携**

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

8.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018 年度 8.1①に  
対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組み概要を記入。
各教員が積極的に他大学、企業、研究所と連携して共同研究を実施し、より高度な研究教育が実施できるよう努めている。生命機能学科では、生命機能学基礎実験の授業プログラムに企業の担当者、JAXA 研究員による講義を組み込んでいる。環境応用化学科では「環境応用化学セミナー」において、学外の講師に講演を依頼している。応用植物科学科では、都道府県の研究所や関連企業とともにインターンシップのプログラムを必修科目として行っている。さらに、学科内に併設している植物医科学センターにおいても、共同研究契約による研究を行っており、農業研究センターや企業等との連携協力により教育研究を進めている。また、国際植物防疫年 2020 (International Year of Plant Health 2020 : IYPH2020) のオフィシャルサポーターとして活動した。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・各学科が専門分野に応じ、各教員が社会との様々な連携を進めている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

**【社会貢献・社会連携の評価】**

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

生命科学部では、各教員が他大学、企業、研究所と連携した共同研究を積極的に進めている。また、授業プログラムやセミナーに学外の研究者等による講演を組み込むような連携も実施されている。さらに、応用植物科学科内に併設されている植物医科学センターが、外部の研究センターや企業との連携協力により教育研究を進めるなど、多様かつ多面的な活動が行われている。インタビューによると、とりわけ公園などで発生する植物の病気の調査、国内ほぼ唯一の対応施設として輸出種子の病原体検査を実費で請け負っており、専門知識や施設を用いて公私にわたって具体的な社会貢献を行っているとのことで、それらの貢献の意義のみならず、こうした地道な活動が同センターのprestigeを高めていると考えられ、特筆に値する。

## 9 大学運営・財務

### (1) 点検・評価項目における現状

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

9.1①教授会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度9.1①に対応

はい
※概要を記入。
学部長以下、さまざまな事案を担当する各種委員会を設け、各種規程を整備し、学部・学科運営を行っている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・各種規定 ・各種委員会委員名簿

### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
・特になし

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・特になし

### 【大学運営・財務の評価】

生命科学部では、学部長・教授会主任・教授会副主任からなる学部執行部を中心として、学科主任、執行部会議、教室会議、教授会とそれぞれに適切な役割もたせる運営体制が取られている。また、学部長以下、さまざまな事案を担当する各種委員会が設けられ、各種の規程に則り、学部および学科の運営が行われている。

## III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。
	年度目標	前年度に引き続き、各学科のホームページのリニューアルや更新を行うことで広報活動に務める。また、前年度は実施できなかったアンケートを新入生と2年生を対象に実施し、学部パンフレットに掲載されている理念・目的などの内容が周知されているかを検証する。
	達成指標	掲載ページの訪問回数、および広報活動に関するアンケートの回答内容。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。



年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	A	
	理由	学部や各学科のHPを随時更新し、新型コロナ対応に関するお知らせや研究・教育活動に対する受賞や表彰者の紹介を行った。学部ホームページの閲覧数は、2019年度37,507、2020年度61,546、2021年度104,384(2/22時点)と大幅に増加している。また、広報活動に関するアンケート調査を実施するとともに、学生モニターについては対面での対談を実施した。学部の理念・目的に関する回答結果を教授会で情報共有した。	
	改善策	新型コロナの影響もあってHPの重要度は年々増しており、来年度もHPの改善に務める。また、引き続き広報活動に関するアンケートや学生モニターを実施して、継続的なデータの蓄積を行う。	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	昨年度に引き続き今年度もコロナ禍による対面での広報活動が十分できない中、本学の理念・目的の周知のためにHPを通して広く情報発信することは極めて重要である。このような中、2019年度以降、HPのアクセス数が毎年上昇している。さらに、昨年度未了であったアンケート調査も実施できたことは評価できる。	
	改善のための提言	新入生と2年生を対象に実施したアンケート結果や学生モニターの結果や感想を次年度以降の学部運営に活かすための検討をしていただきたい。	
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格なPDCAサイクルを行う。	
	年度目標	前年度の年度末状況報告書を反映して改善(A)した年度計画(P)を立て、自己点検評価シートを作成する。年度中は、質保証委員会において、執行部の年度計画の実行(D)状況を確認する。年度末には、質保証委員会の評価(C)を反映させた年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし次年度に引き継ぐ。これにより、厳格なPDCAサイクルを行う。	
	達成指標	執行部会議および質保証委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	自己点検評価シート、年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし、厳格なPDCAサイクルを行っている。なお、執行部会議を16回開催、質保証委員会を4回開催し、議論の内容は議事録として記録を残している。
		改善策	特になし。引き続き厳格な自己点検を継続する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	執行部会議に加え、質保証委員会による年度末状況報告書等の点検・評価が厳格に実施されている。近年、PDCAサイクルが適切に行われていると評価できる。		
改善のための提言	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学部開講科目における教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、ディプロマ・ポリシーと各科目の関連性を明確にする。	
	年度目標	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・専門教育連携委員会を開催し、教養科目と専門科目で似た内容の科目の洗い出しや教養科目における生命科学部生向けの動機づけなど、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策を継続して検討する。	
	達成指標	教養・専門教育連携委員会の開催記録。履修の手引など。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

			専門教育連携委員会を開催した。学生モニターで得られた問題点や課題について議論し、教養科目における生命科学部生向けの動機づけなど、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策が検討された。
		改善策	特になし。来年度も教養・専門教育連携委員会を開催し、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策を継続して検討する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	教養・専門教育連携委員会が開催され、生命科学部における教養・専門の間の連続性をより強化するための方策が検討された点は評価できる。
		改善のための提言	今後も教養担当教員と専門科目担当教員の意見交換の場を継続・強化していくことが望まれる。
No		評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
		中期目標	100分授業の特性を活かしたアクティブ・ラーニングの実施を促進する。
		年度目標	新型コロナウイルス感染症に対応するため、昨年度に引き続きオンライン授業やオンデマンド授業の充実に尽力する。また、ハイフレックス授業や対面での実験実習など、感染症対策に配慮しながら学習成果の向上を目指して新たな教育方法を模索していく。感染症の状況に応じて授業形態を随時変更するなど、柔軟に対応していく。
		達成指標	オンデマンドやオンライン授業の実施状況の把握や、これらの授業公開が実施可能か検討した上で、実施する。シラバスの活用。
	4	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	昨年度に引き続き新型コロナの影響下であったが、多くの講義でハイフレックス形式の授業が導入され、加えて授業アシスタント制度やラーニングサポーターを活用することにより、学習効果の向上が図られた。実験科目では、感染症対策に配慮しながら対面での実習が実施された。また、教授会の時間帯を利用してFD活動を複数回実施し、授業方法を改善するための組織的な取り組みを行った。授業公開は春学期・秋学期とも全教員を対象として行った。Google フォームとスプレッドシートを用いることによって授業相互参観の申請を電子化し、同時に授業の実施形態を調査できる体制を整えた。
		改善策	来年度もオンデマンドやオンライン授業の実施状況を把握し、学習効果をモニターする。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	昨年度に引き続き今年度もコロナ禍の対応として、多くの授業でハイフレックス形式の授業が導入された。また、アシスタント制度やラーニングサポーター制度を巧みに活用しながら学習効果を高めたことは評価に値する。その他、FD活動や授業公開などにより、授業の質の向上に努めたことは高く評価される。
		改善のための提言	授業公開において、本年度新たに導入したGoogle フォームとスプレッドシートを用いた参加手続は本事業の運営を円滑にしたことから、次年度以降も継続すべきである。
No		評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
		中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。
		年度目標	生命科学部では、学部生の学会発表が多くなされており、研究成果の対外的発表が活発に行われている。今年度以降も、この状況を持続させることに注力し、学外発表費用の補助も拡充していく。
		達成指標	学部生の学外発表の回数。
	5	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	学会における学生の発表は、そのほとんどが大学院生によるが、学部生の学外発表数も3学科合わせて29件であり、新型コロナの影響で学会がオンライン開催となる中、対外的発表が継続的に行われた。
		改善策	来年度もオンライン開催の学会が多いことが想定されるが、引き続き研究成果を対外的に

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

		発表することを促進する。	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	研究活動の成果を研究集会や学会等で対外的に発表することを促していることは、理系学部の学生の教育として重要である。コロナ禍のため、多くがオンライン開催ではあるが、その数を継続的にモニターしている点は評価できる。	
	改善のための提言	経常費から支出する学部学生を対象とした学外発表費用は、交通費の上限を除外する検討をすべきである。	
No	評価基準	学生の受け入れ	
6	中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。	
	年度目標	例年、新入生に対して広報イベントに関するアンケートを行い、入学者がよく参加したイベントや、進路の最終決定におけるホームページの重要性などについて調査してきたが、2020年度はアンケートが実施できなかった。2021年度は1, 2年生に対してオンラインでアンケートを実施するとともに、多くの広報イベントが中止になった影響などについても分析する。	
	達成指標	アンケートの実施とその分析結果。	
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
	理由	昨年度実施できなかった広報イベントに関するアンケートを、Google フォームを利用して実施した。188名からの回答が得られ(対象:1, 2年生)、分析結果を教授会で情報共有した。新型コロナの影響を受けた1年生では、オープンキャンパスへの参加者が減少する一方、対面で実施した小金井祭への参加者が増加し、ホームページやYouTubeを参考にした割合が増えるなど、広報イベントに対する影響の変化を把握することができた。	
	改善策	来年度もオンラインを利用したアンケートを実施し、広報活動の効果を調査する。	
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	昨年度に未了であった様々なイベントおよびアンケートが、本年度実施できた。それにより、対面とネットを利用した活動により広報イベントに対する影響の変化が把握できたことは極めて高く評価される。	
	改善のための提言	—	
No	評価基準	教員・教員組織	
7	中期目標	①教養教員の採用および教養科目の担当教員の再編を含め、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。	
	年度目標	教養教育担当の教員の採用により、英語、数学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学の科目が生命科学部の専任教員によって担われることになり、バランスのとれた教養教育体制が整った。 今後は、教養科目と学部専門科目との連携を強化するために教養・専門教育連携委員会を開催し、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。	
	達成指標	教養・専門教育連携委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。	
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
	理由	第3回教養・専門教育連携委員会を開催し、教養教育と専門教育の連携についての問題点の共有や今後の課題について話し合った。また、教職担当の専任教員の採用により、バランスのとれた教育体制が整った。さらに、リメディアル科目の設置、専門と基礎をつなぐ新規学部共通科目の検討を行うことを目的として、基礎教育カリキュラム委員会を設置した。	
	改善策	来年度も教養・専門教育連携委員会を開催するとともに、基礎教育カリキュラム委員会からの提案に基づいてカリキュラム変更を行い、生命科学部にふさわしい教養教育体制を整える。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた。B:改善することができなかった。」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
	所見	教養・専門教育連携委員会を開催し、教養教育と専門教育の連携についてその問題点や今後の課題を共有できた。また、基礎教育カリキュラム委員会を設置し、その提案に基づき生命科学部に適した教養教育体制を柔軟に整える体制を整備したことは高く評価される。	
	改善のための提言	—	
No	評価基準	教員・教員組織	
8	中期目標	②在外研究を推進する。	
	年度目標	在外研究中の研究室の人的サポートなど、制度のより柔軟な運用が可能になるような方策を関連する委員会で検討することに加え、研究担当理事への要望などについても検討していく。また、2020年度に開催できなかった帰国報告会をオンラインで開催し、制度への理解と改善方法を検討する。	
	達成指標	委員会の議事録および帰国報告会の開催記録	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	昨年度、在外研修制度を利用した教員の帰国報告会が延期されていたが、今年度はオンラインで開催した。また、新任教員の歓迎会も同時に開催した。
		改善策	新型コロナの影響で在外研修制度を利用することが困難な状況であるが、柔軟な、あるいは代替の運用法について検討していく。
		質保証委員会による点検・評価	
所見		昨年度に未了であった在外研修教員の帰国報告会および新任教員の歓迎会がオンライン開催できたことは評価できる。	
改善のための提言	在外研修制度の積極的な活用および柔軟な運用を検討していただきたい。		
No	評価基準	学生支援	
9	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。	
	年度目標	留学生との懇談会を対面で開催することが困難な場合には、オンラインでの開催を検討する。留学生に対して必要な修学支援に関する調査を行い、支援制度の確立を検討する。	
	達成指標	留学生との懇談会の開催記録。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	留学生との懇談会は新型コロナの影響もあり開催を自粛したが、Hoppii を用いた修学支援の呼びかけを行った。
		改善策	留学生との懇談会は新型コロナの影響で対面で開催することは困難であるが、修学支援の呼びかけを継続する。
		質保証委員会による点検・評価	
所見		コロナ禍で制限のある中、留学生に Hoppii を用いた修学支援の呼びかけを行った点は評価できる。	
改善のための提言	次年度も留学生に Hoppii を用いた修学支援の呼びかけを行うことを検討していただきたい。また、留学生の状況を把握することも含めて、コミュニケーションをとるためのオンライン懇談会等の開催も検討していただきたい。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
10	中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。	
	年度目標	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究室紹介を活発に行う。特に、学生における研究室紹介の補助金の継続を要望していく。 また、ホームページによる研究・教育活動の紹介の促進にも着手する。	
	達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究紹介の回数は20回であった。新型コロナウイルスの影響で中止になるものが多かったが、ホームページによる研究や教育活動の紹介、受賞や論文のプレスリリースを積極的に行った。
	改善策	引き続き、オンラインを活用することによって、学外へ向けた研究・教育活動の紹介を継続する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	HPによる研究や教育活動の紹介、受賞や論文のプレスリリースを積極的に行った点は評価できる。
	改善のための提言	次年度もHPにて積極的にプレスリリース等をおこない、研究成果を広く研究・教育活動を広報していただきたい。
<p><b>【重点目標】</b>  <b>教育課程・学習成果【教育方法に関すること】</b>          新型コロナウイルスの影響により、オンデマンドやオンラインでの授業が余儀なくされているが、この機を利用して新たな教授方法を検討するとともに、感染状況に配慮しながらハイフレックス授業や対面授業の拡充を図る。  <b>【目標を達成するための施策等】</b>          感染状況に応じて、生命科学部としての授業実施方針を迅速に策定する。また、新型コロナウイルスの影響下ではあるが、授業公開を通常通り実施して、授業の方法や工夫について相互に参考にできるようにする。授業実施方法や学習成果について教員にアンケートを実施して、各授業形態の利点と問題点を精査する。</p> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b>          昨年度に引き続き新型コロナウイルスの影響下であったが、多くの授業でハイフレックス方式が取り入れられ、学習効果の改善が図られた。リメディアル科目や専門と基礎をつなぐ新規学部共通科目を改善するために基礎教育カリキュラム委員会を設置し、生命科学部にふさわしい教養教育体制に向けた検討を開始した。また、広報活動に関するアンケートをオンラインで実施し、その結果を分析することによって、広報イベントに対する影響の変化を把握することができた。在外研修制度を利用した教員の帰国報告会や新任教員の歓迎会をオンラインで開催するなど、多くの項目で年度目標を達成することができた。</p>		

**【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】**

<p>生命科学部の2021年度の目標に対する達成状況は、COVID-19下の困難な状況にもかかわらず十分な達成度が得られていると考えられる。学部として不十分と判断しているのは留学生に対する修学支援であり、来日が困難な環境下ではそもそも従来通りの達成が困難なものであるし、そのなかでも Hoppii を用いた修学支援の呼びかけなど、状況に適した対応がなされていることから厳しめの自己評価をされたものと推察される。</p> <p>重点目標に挙げられている COVID-19 対応を起点とする新たな教授方法の検討も、ハイフレックス講義の拡大など、学習効果の改善が得られている。さらに基礎教育を中心とした教育改革の取り組みも開始されており、教育改革が着実に進められる体制が根付いている点は高く評価されるべきものとする。</p>
---

**IV 2022 年度中期目標・年度目標**

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。
	年度目標	前年度に引き続き、学部、および各学科のホームページのリニューアルや更新を行うことで広報活動に務める。また、学生モニターを実施し、学部パンフレットに掲載されている理念・目的などの内容が周知されているかを検証する。
	達成指標	掲載ページの訪問回数、および学生モニターにおける回答内容。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格なPDCAサイクルを行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	年度目標	前年度の年度末状況報告書を反映して改善(A)した年度計画(P)を立て、自己点検評価シートを作成する。年度中は、質保証委員会において、執行部の年度計画の実行(D)状況を確認する。年度末には、質保証委員会の評価(C)を反映させた年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし次年度に引き継ぐ。これにより、厳格なPDCAサイクルを行う。
	達成指標	執行部会議および質保証委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、カリキュラムを見直し、リメディアル教育など新しい科目を導入することで、理系基盤教育を充実させる。
	年度目標	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・専門教育連携委員会を開催する。今年度は、昨年度までに行った議論に基づき、一部理系教養科目を改編し、リメディアル科目、新たな理系教養科目の新設を目指す。
	達成指標	教養・専門教育連携委員会の開催記録。履修の手引など。生命科学部基礎教育カリキュラム委員会の開催回数。教授会議事録。学則。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	対面とオンライン両方の利点を組み合わせた新しい教育・学習形態を確立する。
	年度目標	新型コロナウイルス感染症に対応するため、ハイフレックス授業や対面での実験実習など、感染症対策に配慮しながら学習成果の向上を目指して新たな教育方法を模索していく。感染症の状況に応じて授業形態を随時変更するなど、柔軟に対応していく。
	達成指標	対面やハイフレックス授業の実施状況を把握した上で、授業公開を実施し、その後のアンケートによりその効果を検証する。シラバスの活用。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。
	年度目標	生命科学部では、学部生の学会発表が多くなされており、研究成果の対外的発表が活発に行われている。今年度以降も、この状況を持続させることに注力し、学外発表費用の補助も拡充していく。
	達成指標	学部生の学外発表の回数。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。
	年度目標	例年、新入生に対して広報イベントに関するアンケートを行い、入学者がよく参加したイベントや、進路の最終決定におけるホームページの重要性などについて調査してきた。2022年度も1年生に対してオンラインでアンケートを実施するとともに、多くの広報イベントが中止になった影響などについても分析する。
	達成指標	広報活動に関するアンケートの実施とその分析結果。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	①生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
	年度目標	教養教育担当の教員の採用により、英語、数学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学の科目が生命科学部の専任教員によって担われることになり、バランスのとれた教養教育体制が整った。今後は、教養科目と学部専門科目との連携を強化するために教養・専門教育連携委員会を開催し、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
	達成指標	教養・専門教育連携委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。
No	評価基準	教員・教員組織
8	中期目標	②充実した教職課程教育を遂行できる体制を整える。
	年度目標	2021年度教職課程担当教員の採用を受け、小金井3学部が連携して教職課程運用上の問題を共有し、対処するための組織として、教職課程連絡会議（メンバー：教職課程担当教員、相談員、副学長補佐、小金井3学部長、学務課職員）を立ち上げた。今後は、さらに連携を強化して実効性を高めるとともに、中高教員となった卒業生との連携なども図りたい。
	達成指標	教職課程連絡会議議事録、開催回数、および議論の内容の記録。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

No	評価基準	学生支援
9	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
	年度目標	留学生との懇談会を対面で開催することが困難な場合には、オンラインでの開催を検討する。留学生に対して必要な修学支援に関する調査を行い、支援制度の確立を検討する。
	達成指標	留学生との懇談会の開催記録。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
10	中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。
	年度目標	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究室紹介を活発に行う。特に、学生における研究室紹介の補助金の継続を要望していく。 また、ホームページによる研究・教育活動の紹介の促進にも着手する。
	達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。

## 【重点目標】

## 教育課程・学習成果

昨年度まで、新型コロナウイルスの影響によりオンデマンドやオンラインでの授業が余儀なくされていたが、今年度は感染状況に配慮しながらハイフレックス授業や対面授業の拡充を図る。また、一部理系教養科目を改編し、リメディアル科目、新たな理系教養科目の新設を目指す。

## 【目標を達成するための施策等】

授業公開を実施して、授業の方法や工夫について相互に参考にできるようにする。同時に授業実施方法について把握して、各授業形態の利点と問題点を精査する。また、生命科学部基礎教育カリキュラム委員会を開催し、リメディアル科目や新たな理系教養科目の新設を目指して議論を行う。

## 【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

生命科学部の2022年度中期目標・年度目標については、理系教養科目の一部改編や、リメディアル科目、新たな理系教養科目の新設を目指すといった、前年度の目標達成状況の総括の結果を踏まえた内容が設定されており、着実な教育改革の進展が期待できるものとなっている。また、授業実施方法の把握を通じた授業の方法や工夫の相互参照など、十分に具体性をもった施策が検討されている。

## 【大学評価総評】

生命科学部の自己点検・評価については、前年度までの良好な取り組み状況を安定的に継続しており、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員組織、学生支援、教育研究環境、社会貢献・社会連携といったそれぞれの方向に対して着実に学部運営を進めていることが見てとれる。中でも、教養教育と専門教育の連携についての検討が進められ、基礎教育のカリキュラム改革へと進展している点は注目に値する。インタビューによると、各種課題とそれらへの対応は新旧執行部で引き継ぎがなされているとのことで、全般的に従来の良好な取り組みは安定的に継続されており、着実な取り組みに根ざした次の改革の兆しも見えていることから、今後も着実に教育改革を進めていかれるものと考えられる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。